No.

21世紀のための友情計画
アフターケアー調査チーム報告書
平成４年（1992年）度

平成５年６月

国際協力事業団

21世紀のための友情計画 アフターケアー調査チーム報告書 平成4年(一九九二年)度 平成5年6月

100
36
TAY

青 業
JR
93-025

JICA LIBRARY
1107911[8]

国際協力事業団
25455

21世紀のための友情計画
アフターケアー調査チーム報告書

平成４年（1992年）度

平成５年６月

国際協力事業団

はじめに

この報告書は、昭和６３年度より開始された「２１世紀のための友情計画」アフターケアー調査チーム派遣に係る、平成４年度実施団体の報告をとりまとめたものです。

アフターケアー調査チームは、ＡＳＥＡＮ青年の日本への招へいをもって開始された青年招へい事業を、双方向の交流に発展させ、彼我の青年の永続的な友情関係を樹立することを目的として派遣しており、平成４年度は、６チームをそれぞれブルネイ・シンガポール、インドネシア、マレイシア、フィリピン、タイ及び韓国へ派遣することができました。

この報告書は、関係各位の本事業に対するご理解を一層深め、今後同チームに参加される方々の参考となれば幸いです。

平成５年６月

研修事業部長
庵原宏義

目　　次

はじめに

I　概要報告 …… 1

II　国別報告

1．ブルネイおよびシンガポール …… 7

2．インドネシア …… 35

3．マレイシア …… 57

4．フィリピン …… 78

5．タ　　イ …… 101

6．韓　　国 …… 125

シンガポール
ブルネイ

ブルネイ
セントジョージ小学校教室

ブルネイ
シナウト農業研修センター訪問帰国青年達と共に

シンガポール国立大学にて帰国青年達と

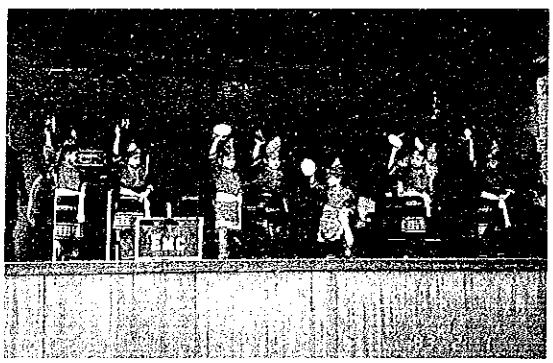
シンガポール
クリストファー・チャン氏宅にてホームビジット

インドネシア

青年スポーツ省大臣表敬

帰国青年が勤務するデポック第一
高等学校で民俗楽器による歓迎

帰国青年が経営するボゴール農業
研修センターでの楽しいひととき



子供たちによるインドネシア２７州の
民俗ダンスでの歓迎

マレイシア

伝統的なココナッツのお菓子作り

人事院表敬訪問

内務省麻薬患者更正センター視察

村の青年とスポーツ交流セパータクロウを楽しむ

フィリピン

アラフータ大学にて

PhilRiceにて

セミナー参加青年たちと

PAJAFAﾎﾟﾝｾｳﾞｨｸ副会長宅でのｶｸﾃﾙﾊﾟｰﾃｨｰ

タ　イ

チュラロコーン大学の見学

サティカセット小学校授業参観

チェンマイ大学の見学

送別会：同窓会メンバーと日本青年の
合同で四季の唄を歌う

韓　国

独立記念館

交　流　会

慶福女子高にて
　校長（右から３人目）
　教頭（左）

ホストファミリーと民俗村にて

I　概　要　報　告

Ⅰ 概 要 報 告

1．目　　的

青年招へい事業において我が国での交流プログラムに参加した日本青年等をＡＳＥＡＮ諸国等に派遣し、ＡＳＥＡＮ青年の本邦招へいをもって開始された本事業を双方向の交流に発展させ、専門分野別に本事業参加経験者の日本理解及び研修成果を更に深め、再交流を促進し、来日時に形成された友情を更に発展させ、永続的な友情関係を樹立することを目的とする。

2．派遣対象者

都内分野別プログラム関係者、分野別地方プログラム関係者、共通プログラム関係者等「21世紀のための友情計画」日本側交流関係者

3．派遣国、チーム編成等

ＡＳＥＡＮ６ヵ国及び韓国に対し、１ヵ国につき１チーム（ただし、ブルネイとシンガポールはあわせて１チーム）合計６チーム（２９名）を派遣。

チームの編成は、チームリーダー１名と団員による。

4．派遣日程等

派　遣　国	実施協力団体	派　遣　期　間
ブルネイおよびシンガポール	国際交流サービス協会	平成５年２月３日～２月１２日
インドネシア	青少年育成国民会議	平成５年１月３０日～２月８日
マレイシア	青年海外協力協会	平成５年２月４日～２月１３日
フィリピン	全国農村青少年教育振興会	平成５年２月９日～２月１８日
タ　　イ	日本友愛青年協会	平成５年２月４日～２月１４日
韓　　国	日本ユネスコ協会連盟	平成５年２月１０日～２月１６日

Ⅱ　国　　別　　報　　告

ブルネイおよび
シンガポール

平成５年２月３日～２月１２日

社団法人　国際交流サービス協会

目　　次

Ⅰ　調査目的

1．調査目的 …… 11
2．調査内容 …… 11
3．調査団員 …… 13

Ⅱ　調査結果

1．日　程 …… 14
2．主要面談者 …… 14
3．調査結果概要 …… 15
4．現地調査・活動内容結果 …… 18
(1) 意見交換内容 …… 18
(2) 同窓会活動状況 …… 23
(3) セミナー・交流会 …… 23
(4) ホームステイ・ホームビジット …… 24
5．所感及び提言 …… 24

Ⅰ．調 査 目 的

1．調　査　目　的

「２１世紀のための友情計画」において、わが国での交流プログラムに参加した日本青年をＡＳＥＡＮ諸国に派遣し、本事業を双方向の交流に発展させ、帰国青年との理解をさらに深めるとともに、日本側関係者の当該国理解を促進し、今後の交流プログラムの改善を図る。

＝調査団の背景と位置付け＝

調査団のメンバー構成は、中央実施協力団体より１名、地方協力団体より２名、都内プログラム合宿参加者参加示唆より１名、共通プログラム実施協力団体より１名の計５名であった。

中央実施協力団体の（社）国際交流サービス協会は、ＡＳＥＡＮ諸国からの受け入れ事績も多く過去の情報は比較的多いが今回の調査によりプログラム担当者が実際に招聘青年の国々を見て人々との交流、帰国青年の意見や感想を通じプログラムの改善に結び付けることが期待できる。

地方実施協力団体からは毎年ＡＳＥＡＮ諸国からの受け入れに積極的に協力してくれている茨城県世界青少年コミュニケーションクラブと栃木県外国青年招聘事業実行委員会の両ボランティア団体から各１名の参加を得た。招聘青年の国の文化や人々に触れ、今後のプログラム実施上の参考となる種々の情報収集が期待できる。また今回の訪問により帰国青年との友情を一層められるものと思われる。

都内プログラム合宿参加者については、合宿セミナーで招聘青年と交流する人であり交流相手の国の実情や人々との交流により交流や討論会への参加に際する参考となる情報入手や一層の国際感覚を養うよい機会となったと思われる。

また、共通プログラム実施協力団体として今回はＪＩＣＡの推薦により全日本剣道連盟事務局より１名が本調査団に加わった。日本の伝統文化と外国文化及び人々との相違や共通点を見聞することにより、プログラムに対する協力内容への工夫等が期待される。

2．調　査　内　容

＝派遣前に予定していた調査事項、行事＝

◎ブルネイ

・ＪＩＣＡ事務所

・日本大使館表敬

・文化・青年スポーツ省表敬

・小学校訪問

・タイブ同窓会会長（Mr.Taib President of Almumni Society 21st. Century）招宴

・ホームステイ

・シナウト農業研修センター訪問

・カンポンアイル（水上住宅）訪問

・中川ＪＩＣＡ事務所長招宴

◎シンガポール

・意見交換会及び懇親会

・日本大使館表敬

・ＪＩＣＡ事務所

・外務省表敬

・ＪＩＣＡ事務所長主催夕食会

・タウンズビル小学校訪問

・人民協会訪問

・社会開発省訪問

・国立シンガポール大学訪問

・ホームビジット

・シンガポール教育学院訪問

3. 調 査 団 員

	氏　　名	生年月日	性 別	自宅住所／所属先
ﾁｰﾑﾘｰﾀﾞｰ	小 西 良 子	S40.10.21 (27)	女性	〒166 東京都杉並区阿佐ヶ谷北1-39-13
				(社)国際交流サービス協会
メンバー	宇佐見 恵 子	S23. 1.20 (43)	女性	〒319-21 茨城県那珂郡瓜連町瓜連507
				茨城県世界青少年ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝｸﾗﾌﾞ
メンバー	澤 田 春 美	S36. 3.27 (31)	女性	〒354 埼玉県富士見市羽沢3-25-38
				埼玉県川越市立仙波小学校
メンバー	黒 瀬 裕 二	S38. 2.24 (29)	男性	〒320 栃木県宇都宮市駒生町1355-2 B-103
				栃木県外国青年招聘事業実行委員会
メンバー	小 林 晋 一	S40. 5. 3 (27)	男性	〒190 東京都立川市一番町2-7-6
				全日本剣道連盟事務局

Ⅱ．調 査 結 果

1．日　程

2月3日（水）	１２：４５	成田発
	２３：３０	バンダル・スリ・ブガワン着（ＢＩ－４３０）
	００：３０	アンズホテル　チェックイン
2月4日（木）	０９：３０	同窓会打ち合わせ
	１０：００	ＪＩＣＡ打ち合わせ
	１１：００	日本大使館表敬
	１２：１５	文化・青年スポーツ省　アスマレー福祉・青年スポーツ局長主催昼食会
	１４：００	文化・青年スポーツ省表敬および説明
	１６：００	セントジョージ小学校訪問
	１９：３０	タイブ同窓会長招宴　於：会長宅
2月5日（金）	０９：００	ホームステイ先訪問（同泊）
2月6日（土）	０９：３０	シナウト農業研修センター訪問
	１２：３０	昼食
	１４：００	カンポンアイル（水上住宅）訪問
	１９：３０	中川事務所長招宴　於：所長宅
2月7日（日）	０７：１５	ホテル発
	０９：００	バンダル・スリ・ブガワン発（ＢＩ－４６６）
	１１：０５	シンガポール発（ＢＩ－４５６）
	１２：０５	カールトンホテル　チェックイン
	１８：３０	日程打ち合わせ
	１９：００	意見交換会および懇親会 於：カールトンホテル２Ｆ　エンプレスルーム
2月8日（月）	１０：４０	ホテル発
	１１：００～１１：３０	在シンガポール日本大使館表敬訪問

	１１：４０～１２：１０	ＪＩＣＡシンガポール事務所訪問
	１４：４５	ホテル発
	１５：００～１５：２０	外務省表敬訪問
	１８：４０	ホテル発
	１９：００	事務所長主催夕食会　於：Ｓｉｎｇａ　Ｉｎｎ
２月９日（火）	０９：００	ホテル発
	０９：３０～１１：００	タウンズビル小学校訪問
	１４：００	ホテル発
	１４：００～１５：２０	人民協会訪問
２月10日（水）	０９：４０	ホテル発
	１０：００～１１：３０	社会開発省訪問
	１４：００	ホテル発
	１４：３０～１６：００	国立シンガポール大学訪問
	夕方	ホームビジット
２月11日（木）	０９：１５	ホテル発
	０９：３０～１１：００	シンガポール教育学院訪問
	午後	自由行動
２月12日（金）	０６：４５	ホテル発
	０７：１５	空港着チェックイン
	０８：４５	シンガポール発（ＪＬ－７１２）
	１６：００	成田着

２．主要面談者

◎ブルネイ

２月４日（木）

・同窓会打合せ

Mr.Mohd. Taib Bin Hj. Osman (President of Alumni Society 21st Century, Supervisor of Youth and Sport)

Mr.Awang Haji Mohd. Noor Bin Haji Salleh(Secretary General, PERTAB-21,1991-1992)
Town and Country Planning Department. Ministry of Development)

Mr. Heriel Hj. Simpol (Fisheries Department. Ministry of Industry and Primary Resources)

Mr. Haji Nayan Haji Nordin (Alumni Society 21st Century)

Ms. Afsah Haji Lamat

・ＪＩＣＡ事務所打合せ

中川　和夫　事務所長

・日本大使館表敬

吉田　重信　大使

中村　泰夫　公使

小宮山　博　一等書記官

・文化青年スポーツ省アスマレー福祉・青年スポーツ局長主催昼食会

Mr. Majid Alisa (The Acting Director of Welfare, Youth and Sport Department)

・文化・青年スポーツ省表敬

Mr. Haji Mohamad Mokti (Senior Officer of the Cultural Section of Ministry of Culture,Youth and Sport.)

Mr. Osman Hj. Salleh (Senior Officer of the Cultural Section of Ministry of Culture,Youth and Sport.)

・セントジョージ小学校(St. Georges School)

Mr. Haji Abu Hanafiah (Principal of the school)

Mr. Karuna (Deputy Principal)

２月５日（金）

・ホームステイ

小西　良子 ―― Siti Amianh Bte Haji Maidin

宇佐見恵子 ―― Afsah Binti Haji Lamat

澤田　春美 ―― Hariel Haji Simpol

黒瀬　裕二 ―― Awang Haji Mohd. Noor Bin Haji Salleh

小林　晋一 ―― Abd. Rani Bin Haji Mohammad

２月６日（土）

・シナウト農業研修センター

Mr. Effendy Salleh (Deputy Principal) and other officials of the center

◎シンガポール

２月７日（日）

・意見交換会及び懇親会

Mr. Christopher Chan (President of ASEAN Japan Friendship Association)

他、同窓会メンバー及び帰国研修生　４０名

日本大使館　西岡　陸之　二等書記官

日本大使館　倉重　高子　専門調査員

ＪＩＣＡ　星　達夫　事務所長

ＪＩＣＡ　石田　幸男　事務所員

ＪＩＣＡ　クリスティン　事務所員

２月８日（月）

・日本大使館表敬

日本大使館　西岡　陸之　二等書記官

日本大使館　倉重　高子　専門調査員

・ＪＩＣＡシンガポール事務所

星　達夫　事務所長

・外務省

Mr. Toh Hock Ghim (Director ASEAN Directorate, Ministry of Foreign Affairs)

Mr. Foo Maw Der (Country Officer ASEAN Directorate, Ministry of Foreign Affairs)

２月９日（火）

・タウンズビル小学校

Ms. Teo Lian Geok (Principal)

１９９２年度参加研修生

・人民協会

Mr. Yee Lai Meng (Deputy Director)

Ms. Shermeen Chew (Head of Youth Group)

２月１０日（水）

・社会開発省

Ms. Winnie Tang (Deputy Director of Staff Development Branch)

１９８４－１９９２年度参加研修生　１１名

・国立シンガポール大学

Ms. Sant Kaur (Assistant Director)

Dr. Luo Siao Chung (Senior Lecturer)

１９８４－１９９２年度参加研修生　８名

・シンガポール教育学院

Mr. Ho Wah Kam (Dean of School Education)

Ms. Joyce Leong (Assistant Manager)

３．調査結果概要

ブルネイでは見学訪問が多く、リラックスした雰囲気であった。ＪＩＣＡ事務所・日本大使館・青年招聘の窓口機関の文化・青年スポーツ省の他、出発前に調査団から希望を出していた小学校と帰国青年の学校訪問を行った。これらの日程・１人１家庭のホームステイのアレンジ等に加え調査団の同行案内も全て帰国青年で組織されている同窓会の人々によるものであった。

シンガポールではＪＩＣＡ事務所の配慮で各訪問先での視察・意見交換とともに多くの帰国青年との面会を果たすことが出来、内容面でも質疑応答の時間を多く設けられており非常に有意義であった。ＪＩＣＡ事務所・日本大使館・外務省・社会開発省・人民協会の他、国立シンガポール大学・教育学院・小学校の訪問及びホームビジットもできた。

各訪問先やホームステイ・ホームビジット等を通じてブルネイ・シンガポールの文化や人々についての理解を深め、訪問先や帰国青年との意見交換や交流を通じてプログラム実施上の有益な情報の入手も出来た。

４．現地調査・活動内容結果

(1) 意見交換内容

ブルネイ

・ブルネイＪＩＣＡ事務所

ブルネイ人の人柄と同窓会活動についての近況報告を中川事務所長より受けた。まず一般的なブルネイの人々の特徴はウェットでありはっきりとＹＥＳ・ＮＯは言わず、目上を敬うタテ社会である、ということだった。同窓会活動についてはインドネシアから始まってブルネイまで６カ国間で毎年持回りで行われるＡＪＡＦＡという同窓会会合があり、今年はブルネイで１月２１日～２３日の期間開かれた。ブルネイの同窓会メンバーはこのための相当の準備期間を要したという。（シンガポールは今年、旧正月と重なったため欠席となった。）

また「２１世紀のための友情計画」の他に技術研修員による同窓会を作ることになったため、同時に１月２１日に決起大会が行われた。「２１世紀のための友情計画」の同窓会員がサポー

トするということで、このニュースはブルネイ国内で大きく取り上げられ、調査団もビデオで視聴したが日本大使館の大使が出席するなど大々的なものであった。ブルネイの同窓会活動はボランティアでありながらも活動に積極的な人々が集まってかなり熱心だということである。交流活動だけではなく、社会福祉活動・写真展等も積極的に行っており、彼らが数年後に中堅幹部になることによってブルネイ国内でかなり大きな力になるだろうとの中川事務所長の説明があった。

今後も今までと同様に優秀な人々を招聘青年として推薦し日本での交流をますます有意義なものとしていきたいとのことであった。更に今年１月下旬に宮沢首相がブルネイを訪問した際に「２１世紀のための友情計画」に非常に興味をもたれ、プログラムが今後も続くことを望まれていたとの話しを伺い、調査団一行も意を強くした。

・ブルネイ日本大使館

吉田大使・中村公使からは現在の国内の諸問題（石油枯渇の対応策や自動車台数の増加に伴う事故の増加等）や子供の就学事情の説明をうけた。また、プログラムに関しては、技術研修やその他の招聘プログラムと違って、交流が中心となる特別なものなのでこれからも持続することを希望するとの意見を頂いた。

・文化・青年スポーツ省

スポーツ省の入っているブルネイ国立競技場内レストランにてマジッド部長主催の昼食会が行われた。レストランからは競技場が一望でき、ここでテニスやハンドボールの国際試合もしばしば開催されるそうである。私達の滞在中も国際テニストーナメントがあり日本からの出場選手もいたらしい。

昼食後は文化会館にてブルネイの伝統的な音楽と踊りを鑑賞し、実際に楽器に触れ、踊りを教わる機会を与えてもらった。文化会館は伝統的建物で、高床式になっておりブルネイ文化を感じさせるものであった。

・セントジョージ小学校

はじめに校長先生より学校概要と学校の教育制度の説明を受けた。この小学校は1928年にイギリスの宣教師１人と女生徒だけから始まったそうである。現在では共学、また最終学年になると文部省とイギリスのケンブリッジで作成される公的な試験を受けなければならなく、その解答用紙はイギリスへ送られ、採点される。イギリスの制度をそのまま踏襲しているブルネイの一部を見ることが出来た。

・シナウト農業研修センター

毎年ここから多くの青年が来日しており到着した際にも１９９２年度の帰国青年が入口で出迎えてくれていた。

最初に教室内で副校長からＯＨＰを使ってセンターの教育制度の説明を聞いた。まずここは国立学校であり、１９８３年から農業学部と農業機械学部の２学部だったが１９９０年から他に３学部が増えた。現在の学生の総数は８０名であり、少人数制のため教育との接触の機会は多い。また農業学部の制度として、５カ月間学生を国の機関や社会へ送って社会勉強の機会を与えるものがある。今後国内でも農業をますます発展させたいとのことである。

ひととおりの説明が終わり、「２１世紀のための友情計画」に関する話しになり、調査団側からの質問として招聘青年が来日したことで得たものは何であるかを聞いてみた。日本の農業学校・施設を訪問したことによって麦の種類や農業機器、農業事情を知ることができたということであった。そしてこれからの希望としては農業関連施設だけではなく商業地域や兜町等のビジネス街の訪問も農業とは無関係ではないので入れてほしいとのことであった。この学校では青年の帰国後、評価会がおこなわれているということでプログラムに対する熱心さを伺うことができた。その後は１０名余りの帰国青年と話合いの機会を与えてもらったが帰国後は視野が広まったという意見を多く耳にすることが出来た。

・カンポンアイル（水上住宅）

国王の宮殿と比べると建物の外見は所々老朽化しているが実際に部屋の中は広々として、豪華であった。どの家も必ず人の集まる居間のような部屋があり、人と人の絆が堅い。偶然翌日結婚式が行われる家を訪問したが、当日は1,000人近い人を招待するということで改めて人々のつながりの深さを実感した。

シンガポール

. 日本大使館

質疑応答形式で大使館関係者とざっくばらんな対話が出来た。シンガポールに関する資料は事前に配られていたにもかかわらず、訪問前にじっくりと読んでいなかったために割合一般的な国の事情に関する事柄になってしまったというのがメンバー全員の意見であった。しかし大使館の方々の丁寧な説明で現地の様子を詳しく把握することが出来た。道路上でのゴミ捨てに対する罰金、看板の規制や経済成長の次は文化の成長を推進しているなど。他に「２１世紀のための友情計画」のプログラムに関してはホームステイを日本各地で行うことについて大変好評であるという話を聞いた。

・ＪＩＣＡ事務所

日本大使館に続きシンガポール事情についての話が質疑応答形式で行われた。また同窓会

活動や帰国後の青年の活動等について星所長より説明があった。例えばジャパンフェアを近年中に行う予定であること、個人的に宮崎県と交流を続けている人が多いなど。また国内一般の人々がどの程度「２１世紀のための友情計画」を知っているかの質問には、まだあまり知られていないであろうという残念な返答であった。

・外務省

表敬訪問で形式的なものであったが忙しい時間を割いて局長が対応してくれた。局長は帰国青年からの評価をよく耳にする様でプログラムの概要に関しても非常に詳しかったために短時間ながらも有意義な訪問となった。局長からの希望としてはホームステイの際にホストファミリーの１人でも英語がわかると青年の感謝の気持ちを言葉で家庭につたえることが出来るのに、ということであった。

・タウンズビル小学校

スライドを使って校長先生からの学校概要説明が行われた。

授業の形式は体験学習が中心となっている。通常の授業は最初に数分間、先生から説明を受けて、その後は１０人ぐらいずつに分かれてグループ学習となる。グループ内では児童同士で英語を使っての話合いがおもに行われる。この授業の目的はこれから中学・高等学校に進学するうえで殆どが英語の講義になるために小学生のうちに完全に修得しなければならないという必然性からのものである。英語を完全に身につけるには非常に良い授業方法だという印象を受けた。また、週に１回全校で発表形式の授業が行われ、生徒の勉強に対する意識を高めるという実績的な教育を行っている。児童は全員制服を着用しており、非常に規律正しかった。

・人民協会

主にシンガポール青年の文化活動を推進している。国内にあるコミュニティセンターは人民協会に所属しており、民族舞踊など様々な指導を市民に行っている。

毎年「２１世紀のための友情計画」の青年指導者グループに参加する青年をここから選出している。来日中は有給休暇を利用しているとのことで青年にとっては少しきつい状態である。来日についての報告書は会報の様な形では特に発行されていないが、青年からの話ではプログラムの評判はとても良く、特にホームステイは期間延長を望む声が多いそうである。

・社会開発省

１１名の帰国青年が調査団のために集合してくれ、対面しての話合いが行われた。まず帰国後の日本の印象は公務員が勤勉である（公務員グループ)、時間に厳しい、歩くのが早い等

であった。しかし地方では都内と違ってゆとりがあって安心したという人や、女性はおとなしいと思っていたが実際はよく話をするので驚いたという楽しい意見も聞かれた。一方では女性の社会進出が進む中で、未だ古い考えが乗っている部分（家庭内だけでなく社会でも）も見られたという人も多くいた。私達はそこから日本の女性の社会的地位とシンガポールの女性の地位の違いや、結婚生活に対する意識の違いを話し合う事が出来た。シンガポールでは最近、女性の結婚がどんどん遅くなっているために最近ではお見合いセンターの様なものもできているが、反面伝統的な結婚は減っているとのこと。それは日本でも同じ傾向であるところから大いに話合いは盛り上がった。

プログラムについては、合宿セミナーでの分科会はお互いの文化を知るのにはとても良かったということ、ホームステイは日本文化を実地で体験出来るので良かったという意見は全員一致した。

話合いは予定の１時間半を３０分以上も過ぎてしまったが、非常に中味のある良い訪問であった。

・国立シンガポール大学

１０名近くの帰国青年との話合いの場を設けてもらった。多くは１９９２年に来日した青年だったが１９８４年に来日した人も含まれていた。話合いはプログラムについての感想と今後の希望が中心に述べられた。まず一番印象に残るプログラムはホームステイで、日本の生活をこの体験で理解出来たようである。またコーディネーターや通訳が有能で交流がスムーズに出来た理由の１つであるという意見もあった。逆に青年たちからの希望は事前研修をもう少し充実させてほしいということと、フォーマルな訪問が多く、気楽に日本青年と話をする機会が少なかったこと、合宿セミナーの分科会のテーマは事前に早めに教えてほしいということであった。他に日本については、単一民族国家のため英会話能力が乏しいがこれから国際化が進むにつれてもっと英語を話す人は増えていくだろうという展望と、それとともに伝統が失われていくのではないかという不安を感じるという意見が出た。

・教育学院

学部長から学院の教育制度の説明がされた。ここは高校卒業後に通う施設だけでなく、大学生が卒業後に、また現役の教員が指導法を学びに来たり、教頭が校長を目指すための１年間の勉強のコース等がある。ここで学んでいる間は授業料は全員全額免除されるが、卒業後万が一教員を辞めたときには全額学院に返さなければならないという制度がある。これは教員不足のシンガポールで教員増加を推進しようとする意図があるのではないだろうか。

残念ながら学部長は１年前に赴任されたばかりで「２１世紀のための友情計画」のことには触れずに終わってしまったが、シンガポールの教育制度がよく理解できたので今後の受入

れの際にもこの知識は役立つと思われる。

(2) 同窓会活動状況

ブルネイ同窓会

まず同窓会会長のタイブ氏を中心に副会長ノール氏、そして４０名以上のメンバーで構成されている。会長・副会長が先頭になって機関誌を発行し、定例会合を行っている。

最近の同窓会活動については前記でも触れたが１９９３年１月２１日～１月２３日にブルネイ国内でＡＳＥＡＮの同窓会会合が行われた。６カ国の同窓会の代表が毎年持回りでＡＳＥＡＮ６カ国のうちの一カ国に集合するもので１９９３年はブルネイであった。６カ国の中でブルネイが最後であり、来年は再びインドネシアで開催されるということである。つまり来年で同窓会も７年目を迎えることになるわけである。ブルネイの同窓会は公的な活動だけでなく、地方のホストファミリー（栃木県等）や招聘青年と知り合った日本青年がブルネイを訪れたときに、メンバーが集まってもてなしをしている。会長のタイブ氏自身も何度も来日し、各地方を訪れて交流を深めているということだった。調査団の滞在中も会合の通知をメンバー１人１人に郵送するということで副会長は忙しそうであった。これからは技術研修員の同窓会も結成されるのでますます活動に熱が入ると思われる。

シンガポール同窓会

同窓会会長のクリストファー・チャン氏を中心に１００名近くのメンバーがいる。毎週金曜日には会合が行われるということで同窓会内の連絡を密にとっているそうである。また１９９３年中にジャパン・フェアという大きな同窓会主催のイベントを行うとのことである。これはシンガポールに日系デパート高島屋が開店するにあたって同時に開催するそうである。内容は残念ながらまだ未定とのことで話を聞くことが出来なかった。同窓会内で特別な機関誌は出していない様だが、同窓会会長及び多くのメンバーは来日中にホームステイをした宮崎県と様々な交流活動を続けているそうである。その活動は宮崎県内でもかなり大きなもので、会長の設計による大きなモニュメントが県内の公園に建てられているということで、交流の活発さが想像できる。さらに９３年内には宮崎県から約６０名の中学生・高校生のホームステイを受け入れるとのことである。ホストファミリーは全員シンガポール同窓会(ＳＡＪＡＦＡ)のメンバーで対応するとのことでメンバー同士の結束の固さには感心させられた。

(3) セミナー、交流会

◎ブルネイでの交流会

２月４日（木）タイブ氏宅にて交流会が行われた。１０名程の同窓会メンバーと大使館員、

ＪＩＣＡ事務所長が集まってのにぎやかなものとなった。山のような食事はすべてMr. Taibの奥様の手作りであった。ブルネイとアフターケアのメンバーは交互に隣同士に座り、談笑を楽しんだ。またそれぞれに自己紹介をしながら今後の抱負等を話合い、貴重な時間であった。

◎シンガポールでの交流会

同窓会メンバー、同窓会に属していない帰国青年と、日本大使館・ＪＩＣＡの計４０名が集まっての交流会が行われた。５つのテーブルに８人ずつ、調査団は１人ずつ分かれての食事をとりながらの談話となった。シンガポールに到着した当日のため、緊張気味であったが、調査団同士団結して、歌や踊りを交えながらの和やかなものとなった。この初日の交流会の顔合せでは後日訪問する施設の担当者の面々に事前に会うことが出来たので良い機会であった。また、同窓会の様子を感じ取ることが出来たため、良かったと思う。

(4) ホームステイ・ホームビジット

宇佐見　恵子

“Ｓｏｒｒｙ，Ｋｅｉｋｏ，Ｓｏｒｒｙ”

ホストファミリーのアフサが息せき切ってホテルのロビーに駆け込んで来た。車の都合で１時間遅れの迎えであった。彼女は、タイブ氏が会長をしているＡＬＵＭＮＩの中でも積極的に活動しているメンバーのひとりである。しかし、その日だけで訪れた家が６軒、ショッピングセンター３ヶ所、海岸２ヶ所、宮殿、中学校、ユースセンター、そして法事にまで出席して百人を越す人に会うことになるとは、その時点では思いもよらないことであった。

１０：００ａｍ、ホテルを発ち、法事に同席するためジャングルを切り開いたハイウェイを叔父の家へと向かう。庭に大きく張られたテントの下には、グレーの衣装を纏った男性が３０人程、椅子に腰をかけてこちらを見ている。家の中では、親類縁者が両手で水を掬うような仕草で向い合い、折りを捧げている。宗教的な会合では男女は同席しないのだそうだ。

１１：００ａｍ、隣りの部屋からの合図で目の前のご馳走ラップが一斉に外される。ポロポロのタイライス、カリーポウダーで煮込んだチキンとビーフ、ココナツミルクとパイナップルの煮込み、野菜の線切りと甘酸っぱいソースのマリネ、モンキーバナナ、オレンジ、ジュースが４～５人分ずつ深皿に盛られている。辺りの雰囲気は一変し、各自に２ドル紙幣の入った封筒が配られた。ギフトだからと言われ私も有難く頂く。年長者は話の中心となり、若い人達から尊敬されている様子が伺われた。

１２：００ｐｍ、残った食べ物はポリ袋に詰められ、後片付けが始まった。日本での様子と重なる情景が見られるので興味を持ち法事に関して尋ねてみると、死後１週間は毎晩７時半に親戚が集まりお祈りをする、そして１４日目、４０日目、百日目と続き、その後は毎年命日に法事を執り行うという。仏式の日取りと余り変わらないではないか。庭先ではアフサ

と若いいとこ達が大きなプラスチックの洗い桶にホースで水を引き、手際良くお皿を洗っている。カラフルな衣装が強い太陽の日射しに眩しい以外は、やはり私の田舎の風景と変わらない。思わず親近感を覚え、カメラを構えた。

１２：３０ｐｍ、アフサの次兄の家に立ち寄る。彼は公務員グループで来日したことがあり、お土産の“刀”２振りが正面に飾ってあった。彼の妻もガールスカウトの代表として群馬でのキャンプに参加している。リビングは広く明るく、２０人分の布張りのソファーが間隔を置いて配置されていた。フィリピン人のメイドが無表情で甘いミルクティーを運んで来た。

１：３０ｐｍ、義姉の車でアフサが母と住んでいるカンポンサラサの典型的な村の家を訪ねる。中は薄暗いが、壁にはディズニーランドでの楽しそうな写真や飾り物で一杯だ。そして、ここにもあの“刀”が丁重に据えられていた。宿泊先はここではなく長兄宅であることを知らされる。

２：００ｐｍ、アフサの運転でいとこをピックアップし、村のスーパーで買物を済ませ、セラサビーチに向かう。果てしなく広がる静かな海と黄金の砂浜に感激。ひんやりしたココナツジュースを口に含み、ヤシの木陰でひと休み。平和でのどかなひと時であった。

３：００ｐｍ、私が海を大変気に入っている様子を感じ取り、今度は釣りやウインドサーフィンのメッカ、ムアラビーチに連れて行ってくれた。その日は、色とりどりのヨットやクルーザーが風を切って舞っていた。水平線に向かって真っ直ぐに突き出した道路を、その先端までドライブして私を楽しませてくれた。

３：３０ｐｍ、長兄宅に着き荷をほどく。白く大きなタイルが玄関から寝室まで敷き詰められている。ホール、リビング、ダイニングそれぞれ３０畳はある。洗面所は１０畳程で、トイレ、シャワーがあり、バスタブはない。大きなポリバケツに水が満たされ、手桶が被せてある。ゴムゾウリはあるが濡れている。ティッシュペーパーは必携であったが、もし、翌日もホームステイがあったなら、私はストッキングを脱ぎ捨て、手桶を使って水で洗い流していたかも知れない。

５：００ｐｍ、義姉の車でアフサの出身中学校へ行く。来週ボルキア国王の訪問があることを誇らしげに教えてくれた。ここで次兄と合流するはずだったがうまく行かず、先にデパートに行くことになった。

７：００ｐｍ、次兄と彼の家族が現れ、ファーストフードの店で食事をとる。

８：００ｐｍ、ユースセンターでタイブ氏と再会する。貼り紙から、ボスニアのイスラム教徒への募金活動が、ここで１週間行われていることを知り、私も少額協力した。中はバザーやカラオケで賑わっていた。私が日本人だということがわかると、ステージの上の司会者が日本語で挨拶してくれた。彼もＡＬＵＭＮＩのメンバーであった。

９：３０ｐｍ、ボルキア国王と第一夫人のお住いのロイヤルパレスの前で記念撮影。純金のドームが煌々と光を放っていた。

１０：３０ｐｍ、いとこを送り、再び長兄宅に戻る。初めてご主人にお会いする。ご夫婦とも教師である。メイドがお茶を運んで来る。小学校の男の子に頼まれ、次兄が２ドル紙幣を渡したりサインをしたりしている。学校で集めている募金だと言うので、わたしでも大丈夫かと訪ねた。母親の了解を得てＯＫだと言って喜んでくれた。兄弟３人頭をつけて私の名前を読んでいた。親の教えには良く従い素直で可愛い。お土産を手渡すチャンスがようやく到来した。

１１：３０ｐｍ、食事が用意されていたが、もう紅茶のひと口も入らない。カレンダーにある日本の家屋や庭園、四季について興味を持ったようだった。

１２：００ａｍ、次兄の家族が帰り、アフサと私はそれぞれの寝室に戻った。明日の朝のシャワーは水か、それともお湯を混ぜるかと聞かれた。ここで初めて、混合栓ではなく、ポリ容器にお湯を足してくれるということがわかった。私は、今晩のうちに水で済ますと答え、手桶で水を浴びた。翌朝はモンキーバナナとコーヒーを朝食にお願いして、エアコンを止め、天井のファンを弱くしてベッドに身を沈めた。

アフサを始め、大勢の方々から頂いたご厚意に感謝しつつ、私のブルネイでの長い長い１日は幕を閉じた。

澤田　春美

ブルネイを離れる時、私のひざの上にちょこんと座っていた６才のムイツが耳元で何かマレイ語をささやいた。同じ言葉をゆっくり２回繰り返し、私にわかってもらいたいというふうである。

それは、「さようなら、さようなら」だった。

私は、この幼い男の子の言葉で、ブルネイ国の人々のあたたかい心に触れた日々が妙に懐かしく思い返され、涙があふれて仕方がなかった。そして、特にホームステイで心の交流を深めることができた私は、ホストファミリーと別れがたい気持ちとお世話になった感謝の気持ちでいっぱいになった。

私にとって、ブルネイでの滞在は予期せぬ感動的な幕切れとなったのである。私は、ブルネイ国についての充分な知識がなかったこともあり、イスラム教国家における生活習慣にどう対応できるかと不安でならなかった。それだけに、ホームステイの一日はブルネイ国を正しく理解する機会となり、数々の出会いと体験は大変貴重だったと言える。

私がお世話になったホストは、同窓会メンバーのハリエル氏。彼の家族は、奥さんと子ども２人、奥さんの父親と母親の６人。インドネシアから働きにきているというメイドさんもいた。ハリエル氏は、私達一行がブルネイに到着した時から、ビデオカメラで撮影をしていて、ほとんど毎日一緒に行動していた。いったい仕事はどうなっているのかと聞くと、漁業局に勤めているが、今回の同行も政府から仕事として受けていてるので大丈夫だと言う。

ホームステイの前の晩、「私はあまり英語が話せないので、明日は少し心配です。」と彼に伝えたところ、彼は首を左右に大きく振ってこう言った。「そんなことは気にしなくていいよ。ぼくの家族だってそんなに英語は話せないのだから同じだよ。英語が話せなくてもそんなことは問題ではないよ。」この言葉と彼の表情は、私の気持ちをどんなに楽にさせたことか。人と人とのつながりは、相手を思いやることから始めることが大切だと教えられた思いである。私の異国の地での不安はすっかり消され、今、日本を離れてそこにいるということを忘れてしまいそうだった。

ホームステイの朝、ハリエル氏はブルーのTシャツにジーパンをはき、トレードマークの黒いサングラスをかけて現れた。ブルネイ青年の服装は、ふだん日本の青年とそう変わりはないようだ。ただ、正装着ではソンコッという縁無し帽をかぶり、金糸・銀糸を施した布（カインソケット）を腰に巻くという。

9時を過ぎて、各々 のチームメンバーがホストの車に乗ってホテルを出発した。いよいよホームステイの一日の始まりだが、だいぶ気を楽にスタートできた。それも、今日までにハリエル氏と行動を共にすることが多かったおかげである。車の中で彼が時々話しかけて来る。私はよくわからず微笑むばかりだが、彼は何とか説明しようと、やさしい単語とゼスチャーを加えて繰り返す。私も理解しようと必死になり、そのうち通ずる。彼は、常に私の立場になって話を進めようとするので、彼のやさしい人柄を見い出せた。

初めに銀行に立ち寄った。最近建てられたばかりらしく、大きくて新しい。駐車場がいっぱいだったので路上駐車のように止めると、管理人が現れてハリエル氏から駐車料金を受け取った。そこは、駐車場スペースらしい。銀行の中は天井が高く、2階へ行く道筋には赤いじゅうたんが敷いてある。カウンターまでの並ぶ位置には、順番を守るようロープでしきられている。皆、ルールに従って用事を済ませており、静かな雰囲気である。私が端のいすに座っていると、となりにいた若い女性が話しかけてきた。どうも日本人だということがすぐわかるらしい。彼女は日本に行ったことはないが、日本語の勉強をしとことがあるという。「東京からきたの？」とさりげなく話しかけてきたので、自然と会話がはずんだ。彼女はいくつかの日本語を思い出すように並べる。日本に対する関心は高いようだ。そういえば、資料に「自分たちの国のことを知ってもらいたいという気持ちの若者が多く、日本人や旅行中の外国人に積極的に話しかけ、友達になろうとする。」とあったが、全くその通りだと思った。

午前中は、彼と2人で博物館やモスクなどを見学した。行く先々で彼は私をビデオに撮り、「写真をとってあげるよ。」と私のカメラのシヤッターも押してくれた。ゲストの側に立った彼の気配りはとてもあたたかい。見学先の受付の人や警備の人も笑顔で対応してくれて、私が日本人であるということで余計に関心を寄せているというふうである。Ｈａｉｒｅｌ氏といえば、どこへ行っても知り合いが多く、車に乗っていてもすれ違う友達の車を見つけてクラクションを鳴らしたりする。狭い街だからというよりも、人とのつながりを大事にしてい

るブルネイの人々の姿を見たという感じがした。昼食を済ませ、２時頃彼の家に着いた。「ぼくの家は小さいよ。でもヨーロピアンスタイルなんだ。」と車の中で説明していたが、何と立派な家でびっくりしてしまった。床は全てタイルで敷き詰められ、部屋の数は７つぐらいだろうか。その一つ一つの広さは皆１０畳くらいはあるようだ。私の部屋も用意されていて、大きなベッドと鏡台があった。天井を見上げると、他の部屋にはクーラーがあったが、ここは大きなプロペラがあり、扇風機の役目を果たしていた。私を出迎えてくれたのは、ムイドュとムイツの２人の男の子と若いメイドさんだった。笑顔で迎えてくれたのでとてもうれしく思った。特に子どもたちは、すぐに私に親しみを寄せて接してくれて、日本人客という特別なイメージなどはないらしかった。どこかはしゃいでいて、メイドさんに「少し静かに。」などと言われているようだった。

この子どもたちと過ごした時間は、今もとても懐かしい。私にとって、この子どもたちと出会えたことは、生涯忘れることはないだろう。なぜなら、Ｈａｉｒｅｌ氏はもちろんだが、私のブルネイ国に対する思いをより深めたのは、純粋な子どもたちだったのだから。

私は、日本から持ってきた折り紙を出して「紙ふうせん」や「つる」を折ってみせた。彼らにも教えて、一緒に作ったり、出来上がった紙ふうせんをとばしたりして遊んだ。彼らは、英語を学校で学んでいる最中で、まだ充分に話せないらしい。それでもマレイ語と英語でしきりに話しかけて来る。私がわかろうとわかるまいと、とにかく積極的に自分の思いを伝えるので、私も日本語と英語で何とか答える。会話にはなっていないかもしれないが、それでも楽しい時間を共有できているのは確かである。それは、心の通い合いがあってこそかもしれない。私は、子どもたちのありのままの自己表現に自分が失いかけていた何かを見つけることができたような気がした。物事を忘れず、自分の力をもっともっと生かして行くことの大切さを知った。何て子どもは純粋なのだろうとつくづく思った。時々、私のひざの上に２人 の子どもがかわるがわるちょこんと座りにくる。甘えたい幼い心がとてもかわいらしく、さっき会ったばかりなのに、もう何日も前から一緒にいるような感じさえしてきた。私など、来る前にはどのように過ごそうかとあれこれ考えていたのに、子どもたちのこうした体当り的な姿を見て、考え方の狭さを反省した。

夕食は、家から車で５分くらい行った所にある、川辺の屋外レストランでご馳走になった。ハリエル氏と奥さんと２人の子ども、それにハリエル氏の妹さんも一緒だった。楽しい夕食となり、子どもたちのおかげでにぎやかになった。帰りは夜のモスクを眺め、写真を撮った。静かな夜にモスクが輝いていて、おとぎの国の中にいるような気がした。

寝る前に奥さんが、「明日の朝はこれを着るといいわ。」と、マレードレスを渡してくれた。ハリエル氏が「プレゼント」だと言った。今夜いっしょに食事をした彼の妹さんからのプレゼントで、彼女の手作りだという。濃い紫色の地に、美しい花模様が描いてあり、ひと目で私はこのドレスが気に入ってしまった。ロングスカートを下にはき、その上にワンピースを

着るのだと教えてもらい、明日の朝が楽しみになった。こんなにすてきなドレスをそっくりプレゼントしてしまうなんて、さすがブルネイといえそうだ。私の手土産はこれでよかったのだろうかとふと考えてしまった。

翌朝７時にドアを強くノックされた。夕べハリエル氏が起こすからと言っていたので彼だと思う。子どもたちが現れて私を朝食に誘ってくれた。言葉が通じないのなら形で示そうと、私の手を引いて、朝食の場所へ案内してくれた。私は、またしても子どもたちに助けられてしまった。朝食といってもティーとスポンジケーキで、あっさりしていた。昨夜、たくさんごちそうになったので、それでちょうどよかった。ここは、メイドさんの部屋である。彼女は母屋の裏にある別棟に住んでいた。広々とした部屋をキッチンとリビングルームで分けているが、家具はほとんどなくて、がらんとした感じの部屋になっている。部屋の中央に簡単な敷物があったが、彼女のくつろぎの場になっているのかもしれない。奥さんといえば、さっき私のマレードレス姿をほめて、まもなく仕事に出かけた。どうやら家事のことはメイドさんがすっかりまかされているようである。

一日は早いもので、ホテルに戻る時間がきた。ムイドュとムイツは何だかしょんぼりしていて、静かだった。子どもながらにさみしさをこらえていたのだろう。父親に言われて、彼らは私にキスをしてくれた。親しくなってこそのあいさつらしい。子どもたちの素直な心に触れた私は、もう一日一緒に過ごせたらという思いが強かった。

ブルネイでのホームステイは、まだまだ数多くの出来事があった。いずれにしても、いつもあたたかい心で接してくれたブルネイの人々によって、異国にいるさみしさは全くなかった。実に人情の厚い国である。豊かな経済力を持っているから人々のくらしも気持ちも落ち着いているのだろうが、私はそれだけではないような気がした。この国の人々が本来持っている「人を愛する心」が平和な国ブルネイを支えているのだと思う。独立してまだまもないこの国では、人々の心を一つにすることが大切だということを誰もが知っているにちがいない。私は今後、多くの日本人にこのようなすばらしい国ブルネイについてもっと知って欲しいと語っていきたい。なぜなら、関わりの深いブルネイ国を知ることは、私達日本人や日本の国について見つめ直す機会になるにちがいないからである。交流を深めるにあたっては、互いの国の正しい理解が必要だが、同時に、自国についてもっと知り、冷静な目で見つめ直すことも大切ではないかと思う。

最後にムイドュとムイツが「ぼくは、日本へ行く。」と言っていたことが思い出された。彼らが成長して日本に来る時、彼らに是非とも会いたいものである。彼らが私との出会いで幼心にも日本に関心を寄せ、将来日本を訪れるきっかけになったとしたら、正しく２１世紀に向けての国際交流の役割を果たせたといえよう。遠いブルネイが少し近くなって、彼らの生活ぶりを時々思い浮かべている。

小林　晋一

２月５日（金）ブルネイでのホームステイの日がやって来た。自分は「２１世紀のための友情計画アフターケア調査団」という大きな計画に参加するのだという事を改めて感じた。朝９時３０分、繁華街から少し外れたアングスホテルのロビーでホストファミリーの方々が迎えに来るのを皆で待ち合わせた。自分は海外経験も乏しく、英語も話せないので、これからどのような人と会い、どうような家で、何が起こるだろうかと思うと、胸の中は期待と不安で一杯であった。

ホームステイ先は、ライさんという４０歳位の公務員の方のお宅に行く事になった。
家に向かう車の中から眺める景色は、緑があふれ、走る道は広く、すれ違う車のほとんどが日本車であったのが印象深かった。
ブルネイは車が普及しており、一家族で平均２台位所有しているとの事だった。信号機が小さく、東京のような交通渋滞も見られず、途中、ライさんは「あれがイスタナ・ヌルル・イマン（国王王宮）だよ。」と説明してくれた。物を指す時は、日本のように人差指を使うが、人（相手や自分）を指す時は親指を使うのがこの国の礼儀だと教えてくれた。
ホームステイ先に到着。大きなすばらしい家であった。まず最初に奥さんと挨拶を交わし、次に、恥ずかしそうにしてお母さんの後に隠れるようにして３人の子供達と挨拶した。９歳の男の子、５歳と４歳の女の子２人で、この子供達のお陰でさっきまでの不安が大分解消された。子供達は、しばらくして自分の所へ寄ってきて、日本のお兄さんが何かをするのを待っているようであった。さっそく自分は、日本の駄菓子店で買い揃えた、しゃぼん玉、ヨーヨー、ケン玉、おり紙、ブーメラン等を取り出して一緒に遊んだ。中でも、おり紙は好評であった。一枚の四角い紙きれが、みるみるうちに鶴や船、兜などに変わってゆくのが不思議らしく、物めずらしそうにのぞきこみ、子供達も一緒に折り紙をして遊び、時のたつのも忘れとても喜んでくれた。そうこうしているうちに、お昼になった。居間にゴザを敷き、その上に「サゴ」というおもちのようなもの、「バラチャン」という鳥肉に辛いソースがかかったものや、焼き魚などが並べられた。どれも日本の味付けとはかなり異なっていたが、みんなと笑いながら楽しく頂いた。

昼食後、ブルネイの街を案内してもらった。ブルネイ博物館は、ブルネイ川が見渡せる小高い丘に建てられたもので、ボルネオ島に生息する動物・昆虫類の標本、原住民(イベン族、ムルット族、ドゥスン族など）の生活様式やブルネイの石油・天然ガスの採掘模型等が展示されていた。又、原油・天然ガスが輸出全体において９０パーセントの割合を占めているとのことである。その他の、スルタン・オマール・アリ・シャイフディン・モスクは、１９５８年９月に先代のスルタンにより建立された回教寺院で、街の中心に位置し、ブルネイの象徴的建造物の一つになっている。一日５回のお祈りの時間には、ミナレット（尖塔）に取り付けられたスピーカーから、コーランが町中に響き渡るということであった。見学後、夕食

の招待を受け帰路についた。途中、身振り手振りの動作をしたり、辞書で調べながら会話をしたが、それでも、お互い目を見れば相手の伝えたいことが伝わって来るような感じを受けた。

帰宅し、改めて家の中を見回すと、日本刀とか手ぬぐいが飾ってあり、日本に関心があるんだと思った。種々考えてみると、ブルネイはこれからどんどん発展して行く国と思います。このような充実した１日を過ごせたことに大変感動し、この機会を与えて下さった全ての方に深く感謝申し上げると共に、ホームステイ先のライさんの家庭に対し厚く御礼申し上げます。

黒瀬　裕二

午前９時にホストファミリーがホテルに来てくれた。ただ、他の４名の仲間と違って私だけに迎えが来なかった。幸い、今回の受け入れプログラムの作成者で毎日フルサポートしてくれていたノールさんが午後５時まで案内してくれることとなったが、午後５時になってもホストは現れず、結局私はノールさんの家にステイすることになった。この程度のハプニングは東南アジアではよくあることだそうで、お国柄と理解するしかない。公務員のノールさんの家には、５台の車があり、金持ちの国を実感したが、住み込みのメイドさんまでいたのには本当に驚いた。日本ではよほどの金持ちでなければメイドは雇えないと思うが、この国では普通らしい。ホームステイ当日は金曜日で、この国では休日である。つまり、イスラム教の礼拝の日なのである。敬虔な信者は一日に５回お祈りを捧げるのだが、私もお供をして２回もモスクに行った。私は皆と握手して食事をしただけで、礼拝というよりパーティーに参加した気分だった。

ホームビジット

黒瀬　裕二

私達５名全員がＳＡＪＡＦＡ（２１世紀のための友情計画の参加者の同窓会）会長のチャンさんのお世話になった。

きれいに片付いた公団のマンションの部屋で目についたのは、数多くの日本の飾り物だった。聞けば訪日４度の親日家だそうだ。ＳＡＪＡＦＡと宮崎県が独自の交流を続けているという話も聞いた。チャンさんの人柄が両国の交流に大きく貢献していることは容易に想像できたので、私も早くこういう役割のできる人間になれればと思った。

小西　良子

シンガポールでは１軒家が少ないというが本当であった。国内の中心街だけでなくそこから車で２０分程離れた地域までに１戸建ての家は殆どといっていいほど見ることはなかった。マンション・公団の生活は窮屈であろうという考えを抱きながら訪問したチャン氏の家

はその予想を大きく覆すものであった。玄関は普通の団地にある広さだが中は２階建てになっていて、１階には人が大勢集まることのできる様に食卓と応接間に仕切りがないオープンスペースになっている。また上品な家具や調度品が並べてあるので落ち着いた雰囲気を感じた。子供部屋等にも案内されたがどの部屋もスペースをうまく利用したものであった。チャン氏一家は２人の子供がおり、調査団の前でも恥ずかしがることもなく全く普段通りに接してくれた。

わずか数時間の訪問であったがチャン氏との話や同窓会の人々との話を聞きながらの有意義な訪問であった。

５．所感および提言

今まで招聘青年達の受け入れのみを担当していたが、今回のアフターケアでは逆に受け入れられる立場となって１０日間を過ごすことが出来たことは貴重な体験であった。今までは訪問先の選定や交流の実施・日程の調整等は常に担当者が招聘青年の関心事を予測して（ある程度は事前に希望を取り入れるが）行ってきたが実際に青年の立場になってみると多くの点で気がつくところがあった。まず出発前に相当数の質問事項が調査団員から出された。どんな服装をしたら良いか、訪問先ではどんな人たちと会うのか、全部で何人ぐらいの人に会うのか、会う人々にはお土産は必要か、どんな物をプレゼントすると良いのか、スピーチはどこでどれくらいの時間するのか、ホームステイは、食べ物は、宗教上のタブーは等々、出発の日が近づくにつれて不安は増大していった。つまり我々が持ったこれらの質問・不安事項は来日前の青年達の心境そのものであったのだろう。ここで現地プログラムに参加するコーディネーターが出発前に出来るだけ詳しい日程を知っておく必要性を大いに感じた。またシンガポールの帰国青年との話合いのなかでも、分科会などの討論会の議題は早めに提示されたほうが事前に調べておくことが出来、より討論会に熱が入るという意見があった。つまり、少なくとも現地プログラムの始まる前までには日程の作成と細部のつめを完全に決めて、同プログラムに於てより詳しい情報を青年達に伝えるべきであると感じた。

今回の調査では、ブルネイでもシンガポールでも共通して、多くの人々と交流をし、話合いをする機会を得ることができた。現地での見学訪問もあったがそれよりもやはり話合いをしたことが何よりも印象に残った。今まで来日した青年の、プログラムの評価結果で最も良いものの一つに討論会が挙げられていたことを思い起こされる。今回の調査団員の中でも今後はもっとプログラムに話合いの機会を多く入れようという声が出た。

日程について、午前・午後に１箇所ずつ訪問し、時々夜間に交流会等があるという形がシンガポールでとられたが、我々にとって一番印象に残り、疲れを感じさせなかった。帰国青年の意見からは来日中の日程がきつかったという意見は特に出ていなかったが、１週間に１回の割合で自由日があれば買物や個人的に行きたいところへ行けるうえ、気分的に余裕ができるので

良いという意見はあった。今回の調査では全日程の中で自由日が半日だったので、帰国青年達の意見を身をもって感じることが出来た。アフターケアプロブラムの目的は、帰国した青年達がその後日本での経験をどの様に活かしているか、そしてその国の背景を知って今後のプログラム作成に役立てるというものであるが、別の面でプログラム作成に関わる我々が逆に青年の立場になる事が出来る唯一の機会であるともいえる。我々は幸いにも２カ国の訪問が出来ため、それぞれに異なった部分を見ることができた。国自体の雰囲気、宗教の点、生活習慣や考え方など。この２カ国を知ったからと言ってＡＳＥＡＮ６カ国全てを知ることが出来たわけではないが、少なくとも我々が学んだ多くの経験を応用して活かすことは十分に可能な筈である。今回の訪問に誠心誠意を尽くして受け入れをして下さったブルネイ・シンガポール両国の関係者の方々への返礼としてもプログラムの更なる改善に努力をしたいと思う。

最後に、今回の調査団のために準備・手配と細部に渡り尽力して下さった両国のＪＩＣＡ事務所・関係機関並びにＪＩＣＡ本部の関係者の皆様にここに改めて感謝の意を表したいと思う。

インドネシア

平成５年１月３０日～２月８日
社団法人　青少年育成国民会議

Ⅰ．調 査 目 的

1．調 査 目 的

「２１世紀のための友情計画」において、我が国での交流プログラムに参加した日本青年等をインドネシア共和国に派遣し、本事業を双方向の交流に発展させ、帰国青年の日本理解を促進し、今後の交流プログラムの改善と、変わらぬ友情関係の樹立を図る。

2．調 査 内 容

派遣前に予定した調査事項及び活動内容は以下の通りである。

(1) 帰国青年の分野別の研修成果及びインドネシア共和国の社会・文化・経済事情等を調査し、受入れプログラムの改善に役立たせる。

(2) 帰国青年に対し、来日時グループ構成分野別にセミナー等の実施、もしくは指導を行う

(3) 帰国青年の家庭におけるホームステイ滞在を通じて、インドネシアの人々の日常生活の一端に触れ、日本での受入れプログラムの改善に役立たせる。

(4) 日本側カウンターパート（合宿参加青年、ホームステイ受入れの家族等）のインドネシア共和国理解を促進させる。

3．調 査 団 員

本計画に基づくインドネシア派遣調査団員は以下の５名である。(年齢順)

○団　長：

湊　明弘(48)社団法人青少年育成国民会議国際交流振興部・副部長

＊１９８４年の本計画開始依頼、一貫して中央実施協力団体の実務担当者として携わっている。

○団　員：

松本　圭司(34)和歌山県海友会・会長

(和歌山県那賀郡打田町役場・農林経済課農業振興係)

＊１９８９年の本計画に係る地方受入れ実施協力団体の受入れ責任者として、またホストファミリーとして活躍。

堀　俊郎(33)大分県企画総室調整課国際交流室・主任

＊１９８８年より本計画に係る地方受入れ実施協力団体の実務担当者として携わっている。

秋本　武史(32)社団法人九州・山口経済連合会調査部・主任

＊１９９１年より本計画に係る九州全県の地方受入れ実施協力団体の事務担当者

として携わっている。

大西　留美(26)ＩＣＳ国際文化教育センター業務部

＊１９８４年以来、国民会議が主催した合宿セミナー日本参加青年による同窓会（クラブ２１）を１９９１年に発足させ、同会のメンバーとして本計画実施に支援協力している。

Ⅱ. 調 査 結 果

1. 調 査 日 程

日順	日　　時	業 務 内 容 及 び 訪 問 先
1	1月30日（土）	
	11:00	・成田空港出発（ＪＡＬ７２５　便）
	18:50	・ジャカルタ空港到着
	20:10	・ホテル（HOTEL　SOFYAN　CIKINI）チェックイン
	:45	・インドネシア既参加青年同窓会（以下、KAPPIJA-21と称する）との打合せ アザナトリ事務局長（Sekretaris Umum, KAPPIJA-21） 他、３名のKAPPIJA-21会員が同席 ＊滞在日程とホームステイに関する打合わせ
2	1月31日（日）	
	11:15	・TAMA MINI INDONESIA訪問 ＊終日、インドネシアの民族・文化の一般的理解を図った。
3	2月　1日（月）	
	9:00	・ＪＩＣＡインドネシア事務所との打合わせ 椎名参事(Assistant Resident Representativi) Ms.ANGRENI職員(Assistant to Training Officer) ＊インドネシアの同窓会活動の現状と課題について理解を図った。
	10:15	・高橋事務所長表敬 ＊インドネシアにおける本計画の評価と帰国後の活動状況について理解を図る。 ＊我が国のインドネシア協力・援助活動の実態について理解を図る。
	11:20	・日本大使館訪問 浜田一等書記官 ＊表敬及び本計画の全体評価と将来展望に係る懇談
	15:15	・青年・スポーツ省（以下、MENPORAと称する）訪問

日順	日　　時	業務内容及び訪問先
		アナスターシャ職員（KAPPIJA-21の会員で今回の調査団のプログラム作成にあたった）
	:30	・アクバル・タンジュン大臣（Minister）表敬 ハルタント次官（Secretary State Minister） ブディプラトノ第四補佐官（Asistant Fourth） ＊本計画に係る成果と参加青年の活発な帰国後の活動等に関する懇談と表敬
	16:15	・KAPPIJA-21との懇談 アーワンシャー会長(President) 他、約３０名が出席 ＊帰国青年の日本滞在中の体験談及び帰国後の活動報告及び日本青年による同窓会活動の実情についての情報提供を中心に懇談を図った。
	20:00	・KAPPIJA-21主催の歓迎夕食会 ＊市内のレストランに於いて、KAPPIJA-21幹部とインドネシア料理を堪能した。
4	2月2日（火）	
	8:00	・ホテルチェックアウト
	9:00	①帰国青年の職場訪問 ・コンピューター専門学院（私立・ジャカルタ市内） ゼン・ヌル校長(Director) ＊本計画での日本滞在体験を生かして、設立した同学院の授業参観を行った。
	11:30	②帰国青年の職場訪問 ・デポック第一高等学校（公立・同市郊外デポック県） ヤティ教諭（Teacher） アンネ教諭（Teacher） ＊同校で、日本での経験を生かして、生徒に日本理解を進めている。特に、我々訪問団のために、同校生徒による民俗芸能を披露していただくなどの日・イ友好を図った。
	13:00	・KAPPIJA-21主催の歓迎昼食会

日順	日　　時	業務内容及び訪問先
		＊デポック市内のレストランに於いて、同行KAPPIJA-21会員及び幹部とデポック市の会員とともに懇談した。
	14:30	・国立インドネシア大学訪問
		＊施設及び構内散策
	17:30	・ホテルにてホストファミリーとの対面
		＊KAPPIJA-21のメンバーから家族の紹介と組み合わせを行い、各家族とともに懇談した後、それぞれの家庭（一人一家庭)に引き取られホームステイプログラムに入った。
5	2月　3日（水）	
		・終日、各ホームステイ家族との交流
		＊詳細は別記参照
6	2月　4日（木）	
	9:00	・ホームステイ先よりMENPORAに集合
	11:30	③帰国青年の職場訪問
		・ボゴール養魚場及び農業研修センター視察・研修
		バーラム所長（Director）
		＊地元の川や自然環境を生かした鯉の養魚場を手広く運営管理している。また、同氏が自助努力して農業研修センターを設立し、同国青年はもとより、近隣諸国の青年にも宿泊で農業実習技術を指導している実情を理解した。
		＊同センターの職員が準備した地元料理を賞味した。
	15:30	・再びホームステイ家庭へ
		＊ホームステイ家族との交流
7	2月　5日（金）	
	9:00	・ホームステイ先よりMENPORAに集合
	:30	・貿易研修センター訪問
		ロズディアナ所長（Director）

日順	日　　時	業務内容及び訪問先
		ジェフリ管理部長(Head,Administrative Division) 安達秀行調整員(Coordinator,JICA Advisory -Team) 他、各部門の専門家 ＊日本の無償援助協力事情及び専門家の技術移転に関する実情についての視察と懇談
	14:30	・ＪＩＣＡインドネシア事務所への報告 高橋事務所長 熊谷次長 ANGRENI職員（Assistant to Training officer） ＊インドネシア滞在中に関する報告と提言を行った。
	17:00	・ホテル（HOTEL SOFYAN CIKINI）チェックイン
	19:00	・感謝の夕べ（レセプション＝プレジデントホテル） （MENPORA） プディプラトノ第四補佐官（MENPORA） （ＪＩＣＡ事務所） 高橋事務所長、熊谷次長、ANGRENI職員 （KAPPIJA-21） エディー副会長、イスリン副会長、他KAPPIJA-21の会員及び滞在中世話になった地元の方々 （ホームステイ家族） 調査団５名のホストファミリー ＊雨の中、約４０名の参加者を得て、日・イ友好の集いを行った。
8	2月6日（土）	・終日、各自由行動 ①グループ…２名は、ホストファミリーと共に終日市内散策と交流 ②グループ…３名は、KAPIJA-21会員の計画によりジョクジャカルタ（ボロブドール遺跡見学）に出発

日順	日　　時	業務内容及び訪問先
9	2月　7日（日）	
		・終日、各自由行動
	17:00	①、②グループともホテルに集合
		・ホテルレストランで、KAPPIJA-21副会長等と夕食懇談
	19:00	ホテルチェックアウト、空港へ
	22:00	ジャカルタ空港出発（ＪＡＬ７２６　便）
１０	2月　8日（月）	
	7:00	・成田空港到着
		＊空港にて再会を約し解散、各自自宅へ

2．調査主要面談者（日程順）

(1) ＪＩＣＡインドネシア事務所

○所　　長　　高橋　昭

○次　　長　　熊谷　晃

○参　　事　　椎名のり子　　（「２１世紀のための友情計画」担当）

○職　　員　　Ms. ANGRENI　　（　　同　　上　　）

(2) 日本大使館

○一等書記官　　浜田　雄二

(3) 青年スポーツ省　　（MENPORA=The State Ministry of Youth Affairs and Sports）

○大　　臣　　Mr.Ir.Akbar Tandjung (Minister)

○次　　官　　Mr.Drs.HHartanto　　(Secretary State Minister)

○第四補佐官　　Mr.H.D Budiprayitno　(Fourth Assistant =KAPPIJA-21 担当)

○秘 書 室　　Mr.Dra.Anastasia SHP (Secretariat Division=KAPPIJA-21)

(4) インドネシア同窓会　（KAPPIJA-21= Alumini Society Indonesia-Japan Frend-ship Programme for the 21st Century)

○会　　長　　Mr.Ir.Irwansyah Tandjung (Chairman)

○副 会 長　　Mr.H.Syarifuddin Soeltan (Vice Chairman)

○　同　　Mr.Drs.Isrin Chandra　(　ditto　)

○　同　　Mr.Eddy Saputra.Se　(　ditto　)

○事務局長　　Ms.Andrmeda Azannatari(Secretari General)

○調査団ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　Mr.Kolier Haryanto　(Member of KAPPIJA)

他、多くのKAPPIJA-21会員

(5) 帰国青年の職場訪問

①コンピューター専門学院 (LPPK=Lembaga Pendidkan dan Pelatihan Komputer)

○院　長　Mr.Zen R. Nur　(Director=1989年勤労青年グループ)

②テポック第一高等学校　(Sma Negeri I Depok)

○教　論　Ms.Dra Yati Rohayati　(Teacher=1991年教員グループ)

○　同　Ms.Anne Agustiane Sapardiah (同＝1992年同上グループ)

③ボゴール農業研修センター(Agriculture Study and Training Center,Bogor)

○所　長　Mr.H.Bahrum　(Director=1990年農業グループ)

(6) 貿易研修センター (IETC ＝Indonesia Export Training Center)

○所　長　Ms.Dr.Rosediana Suharto MSc.(Director)

○管理課長　Mr.M.Djufri　(Head,Administrative Division)

○JICA調整員　安達秀行　(Coordinator,JICA Advisory Team)

○専門家　Mr.H Chikashige　(貿易研修担当)

○　同　Mr.T Hashimura　(繊維・縫製担当)

○　同　Mr.Ir.S Takeuchi　(木工・家具・ラタン担当)

○　同　Mr.K Yamamoto　(ゴム担当)

○　同　Mr.D Oya　(商業日本語担当)

3. 調査結果概要

本調査団においては、従前の調査団報告書にとらわれず、また調査内容の重複をさけるなどの配慮をして当該国を訪問したが、初期の調査目的を概ね達成できたと確信する。その概要は以下のとおりである。

(1) 極力移動を少なくし、ジャカルタ市を中心に定点活動を行った。したがって、インドネシアの人口密度の高いジャワ島における文化や生活習慣を学んだにすぎないが、日本での受入れに係る者としては、概ね当該国の一端に触れたことだけでも理解促進に大変役だった。

(2) ホームステイ滞在では、受入れ家庭のホストが帰国青年であったことから、今後の本計画に係る同国青年のホームステイ滞在プログラムに支障をきたさないよう、文化・宗教・生活習慣の違いを十分に伝えるためのプログラムが準備され、日本での受入れプログラム作成に大変役立った。

また、日常の生活体験やプログラムを通じて、彼等のホスピタリティーに富んだ受入れと併せて家族の心温まる応接を通じて、我々一人一人に生涯忘れ得ぬ思い出を刻みつけてくれた。

(3) 帰国後青年の当該国における活動組織として、同窓会KAPPIJA-21が存在しているが、広大な地域に会員が分散していること、また、日常活動推進のための資金及び人材面で大変苦労していることから、同同窓会活動活発化のための情報提供を行った。

(4) 本計画は当該国の２１世紀を担う青年たちにとって、大変有意義な事業として関係者から高い評価を受けているが、日本での体験を通して帰国後の青年たちの日本理解促進のための事後活動推進方について多くの指摘を受けるとともに、帰国青年のアフターケアの重要性について再確認をした。

４．現地調査・活動の内容

(1) 主な訪問先における意見交換の概要

①ＪＩＣＡ事務所

イ.「２１世紀のための友情計画」のフォローアップについて

＊本計画によって、同国青年を日本に招へいすることは、友情計画のスタートに過ぎず、帰国した青年をいかにフォローアップするかが重要である。

＊このことからも、招へい事業に費用をかけることはもとより、帰国青年に対するフォローアップにも費用をかけることも大切なことであることを十分に認識してほしい。

ロ. KAPPIJA-21の活動に関する問題点について

＊同同窓会組織は、現在1,350名で発足当時は家庭的にまとまっていたが、現在では、地域的にも一つにまとめていくことが困難になってきている。

また、同会の一番の問題は資金不足であることから、活動の中心がジャワ島のジャカルタ市周辺のみに限定されてしまっている。

＊従って、KAPPIJA-21は単なる同窓会でなく、より性格を明確にした方が国内的にも活動がしやすく、また資金の提供も請けやすくなると思われる。

ハ. 対インドネシア援助協力の実情について

＊我が国のＯＤＡ総額の約１３パーセントがインドネシア向けであり、最も多額なＯＤＡ受入れ国である。(内９０パーセントが有償資金援助である)

我が国からのＯＤＡは、鉄道、高速道路、電力、港湾の整備など、主に基盤整備（インフラストラクチャー）関連事業に使われている。

ＪＩＣＡの援助協力の実績からみても、約１０％対インドネシア向けである。

②ＭＥＮＰＯＲＡ訪問

イ. 本計画への期待

＊ＭＥＮＰＯＲＡは、同国の憲法前文に掲げられている建国五原則「パンチャシラ」の精神にのっとり、他民族国家である同国国民の団結意識の醸成と将来を担う青年指導者の育成のために、本計画へかける期待は、非常に強いものがあった。

ロ．ＭＥＮＰＯＲＡ大臣挨拶（全文）

『この「２１世紀のための友情計画」による青年交流に関しては、我々MENPORAの所管にあるが、この事業に参加した青年たちは皆一応に満足して帰国している。私も、この事業のような青年による友好交流が、日本とインドネシア両国の友好を深めていくために大変重要であると考えている。

この事業に参加を希望する青年は大変数多く、我々が２７州からの応募者の中から優秀な若者を選抜しているが、日本へ行った青年たちは、政治、経済、文化などあらゆる分野で有意義な知識を得ているほか、ホームステイ等により人と人との交流を積み重ね、日本とインドネシアの友好関係という多くな交流の基礎になっていると信じているところである。

帰国青年の同窓会としてKAPPIJA-21という組織があるが、現在約1,350名の会員により運営され定期会合など各種の情報交換が行われている。展覧会やセミナー、意見交換など、この同窓会であるKAPPIJA-21が行っている活動が、将来日・イ両国の友好交流の進展に大きく役だっていくものと期待しているところである。

本計画に関しては、大統領や国会に対しで定期的に報告を行っており、大変高い評価を得ているところから、今後とも事業の内容充実が高められ、益々の発展を願っているところである。』

③在インドネシア本邦大使館

イ．本計画について

＊アセアン青年招へい事業は青年招へい事業の先駆けとしても高い評価を受けている。

＊いよいよ第３フェーズを迎えて、一層の内容充実を図る必要がある。

そのためにも、各国の実情に沿ったグループの編成の検討及びフォローアップやアフターケアーの在り方についても検討が必要である。

＊特に、フォローアップについては、ＪＩＣＡの枠を越えて考える必要がある。

④KAPPIJA-21訪問（特に代表的な意見について記述する）

イ．日本滞在中の感想

＊ホームステイ滞在の期間の延長希望。（最低４泊５日程度を希望）

＊日本青年との交流の機会が少ない。（継続しての交流機会を希望）

＊日本全体が平等に発展していることに感心した。

ロ．KAPPIJA-21の活動

＊同窓会の運営は帰国時に各青年から徴収する一時会費（￥2,000-32,000Rp）で賄っており、資金面での困難がある。

＊日本に関するセミナーを開催している。

ハ．KAPPIJA-21からの要望事項

＊日本国内でのプログラム終了後に記入する評価表の内容を変革してほしい。

＊また、各国青年が帰国後、日本体験を生かして、生活しているかまたそれらの体験が帰国後どの様に役だっているか等のアンケート調査を実施してほしい。

＊事後活動の活性化や日本理解のための会員へのアフターケアー（フォローアップ）に資金援助してほしい。

⑤貿易研修センター訪問

イ．同センターの設立経緯

＊同センターは、プロジェクト方式の無償資金援助によりタイ、フィリピンに次いで３番目に設立され、商業省の管轄である。

＊無償資金協力の内容は、センターの建物、研究器材など２０億円である。ＪＩＣＡとの技術協力は１９８８年からの５年間で、現在９名の長期専門家を派遣している。

＊現在長期専門家は同国のカウンターパートの養成に力を注いているが、予定通りに育っていないのが現状である。

ロ．研修コースの内容

＊研修期間は１日３時間で、１コースあたり１５万～４０万ルピアの受講料がかかる。受講者の８割が民間、２割が公務員で、民間は職場の指導的立場にある人が多い。

ハ．同センターの将来展望

＊国土の広い当該国においては、地方からの研修受入れが困難なことから、同国政府ではアジア開発銀行の資金協力を得て、スマトラ島など４島に同様な貿易研修施設を建設する計画を推進しているという。

⑥コンピューター専門学院訪問（ＬＰＰＫ）

イ．同校の沿革と概要

＊１９８７年に設立、開校時は１０台のコンピューターでオペレーターの養成授業を開始した。

＊現在、ジャカルタ市内に４つのキャンパスを持つまでに成功し、７５名指導教官を含む職員数で、約1,000名の生徒が通学している。卒業生は現在までに約12,000人を社会に送り出している。

＊特に、校長が本計画に参加した際に、日本でのコンピューター関連施設をで学んだことが今日の学生の指導や運営に大変役だったと報告していた姿が印象的であった。

＊コースは基礎編と応用編で、授業はコンピューター理論（オペレーションのノウハウが中心）と実技（トレイニング）にわかれており、１か月コースと４か月コースが設定されている。

⑦デッポク第一高等学校訪問

イ．同校の沿革と概要

＊１９７６年デポック県の公立学校として設立され、現在では就学率の高い高校である。また、大学進学率は在校生の６０パーセントで内７５パーセントが国立志望で、午前の学校である。特に３年生には補習授業も実施している。

＊同高校では、５０名の教諭が１８クラス約７００名の生徒を教えており、１時限45分授業で１日７時限（金、土曜日は６時限）行われている。

＊同高校での特色としては語学授業に力を入れており、日本語学習も行っているが適切な教材不足から不自由しているとの指摘があった。

⑧チナガラ養魚場及び農業研修センター訪問

イ．チナガラ養魚場の沿革と概要

＊１９７８年に同氏の住居地の自然を生かし（直接、河川から養殖池に取水し再び元の河川に戻すという還流システム採用＝２５分で１サイクル）、観賞用と食用の鯉の養殖を始め、開始当初は年間６０キログラムの成果を上げた。現在では国内はもとより近隣諸国（特にマレイシアを中心に）へも輸出している。

＊特に、日本の民間団体であるオイスカ産業開発協力団の援助で技術指導を受けた。

ロ．農業研修センターの沿革と概要

＊インドネシアでは、スハルト大統領がナショナル・ユースリーダーとして全国２７州から毎年各州１名の各分野で功績のあった青年指導者に対し表彰する制度がある。

１９９０年に同センター所長のバムール氏は、西ジャワ州の農業開発青年のリーダーとして推薦を受けナショナル・ユースリーダーとして、大統領から表彰されたことによって、同年、本計画青年招へい事業で来日した。

＊この受賞によって国及び州から１００ヘクタールの土地をボゴール市の自宅近くに提供を受けた同氏は、日本からの帰国後日本式の研修センターを参考にして「農業研修センター」を設立した。

＊同研修センターは民営であることから研修生の研修料で運営されており、一度に約80名の研修生受入れ可能施設で、約２か月間の研修が実施されている。

１９９０年運営開始以来、約1,150名の研修生を受け入れており、内２５０名は海外からの研修生受入れで約９００名が国内全土からの研修生である。特に今年度はアフリカからの研修生も受け入れることとしている。

研修生の８５パーセントが農業従事者で１５パーセントが公務員及び学生であり、特に年齢制限は設けていない。

＊同研修センターの研修内容は、野菜・果樹類の生産方法等が主で、葱、茄子、バナナ、パパイヤ、パームツリーなど栽培されており、収穫された農産物は市場に出さずに、

自家消費されている。

(2) ホームステイ実施結果

ホームステイの実施結果については、当国民会議が１９９１年にマレイシアで同調査を実施した際、団員に共通の項目で記述させたホームステイ・アンケートと同様の内容で今回も実施したことから、今後の受入れにあたっては、比較しながら参考に供することとする。

★ ①湊　明弘

イ．受入れ家庭とその家族構成

◎ホ　ス　ト：Mochamado Ismail（M．３５歳）

１９８６年農村青年グループで来日（当時ジャーナリストとして参加）

Emi Ismail SH　（F．３１歳）

１９８６年青年指導者グループで来日

＊職　　業：Indonesia Marine Sport Foundation

（インドネシア海洋スポーツ基金・会長）

＊勤務先住所：Jl.Bangka 111/19A Kemang Jakarta 12730

＊自宅住所　：Jl.Pondok Jaya VI No.9 Bangka Jakalta Seltan

◎家族構成：上記夫婦に子供（Mr.Edo Ramado na Ismail ３歳）

Mr.Ismailの両親、兄弟、従兄弟、姪等１３人が同居している。

◎宗　　教：イスラム教

ロ．住まいと食事の内容

◎住まい：

＊ジャカルタ市内中心部より約２０キロメートル、車で約１時間（朝夕の混雑時には約２時間もかかる）ほど行ったジャカルタ市郊外の高級住宅地で、高いH鋼の塀に囲まれた白い２階建の独立住宅である。

＊玄関を囲むように芝生を中心に小さな植え込みが作られており、大理石のテーブルセットが配置されている。玄関横には車２台が駐車できるカーポートが作られていた。建物の内部で、１階は中央３０畳以上のオープンスペースで居間を兼ねており、それを囲むように台所とトイレ・水浴び場が２室等使用人部屋を含む３部屋の個室がある。また、内部の２か所から２階へ上がる階段があり、１階同様に中央３０畳以上のオープンスペースで居間を兼ねており、それを囲むようにトイレ・水浴び場が４室あり、外部に屋根付きのベランダが設置されており洗濯物が雨の日でも濡れないようになっている。

＊屋内の共用スペースには中国製の陶器や珍しい調度品が所狭しと並べられており、室内は全てジュータンが敷き詰められていたので、室内では裸足で行動した。

＊２階４部屋のうち１室（１０畳の広さにダブルベットと備え付きの洋服箪笥と三面鏡からなる部屋）を客室として提供された。

＊１家族の使用人と車３台を所有し、Mr. Ismailの兄は、President Taxiのオーナーであることからも、大変な上流階級である。

◎食　事：

＊朝食は毎日変化を持たせ、インドネシア風炒め御飯（ナシゴレン）にインドネシア紅茶であったり、クラブサンドウィッチにバリコーヒーであったりと、外国人であることから大変メニューに気を遣って下さった。夕食は、到着時以外、市内レストランでの外食であった。

＊家庭滞在中、私の好みを聞いて、母親はケーキを作ってくれるなど、毎日違った珍しい果物とバリコーヒーを準備してもてなしてくれた。

ハ．体験と感想

◎感　想：

＊私は、マレイシアで過去にイスラムの家庭に今回同様、ホームステイを体験していたので心の準備はできていたはずだが、今回はあまりにも上流家庭でなおかつ大家族の家に滞在する機会を得、日本の核家族化の状況と比較してどちらが人間として成長するに相応しいか真剣に考えてしまった。

（勿論、一概に比較することはできないが…）

＊ホストの夫婦は過去に日本に参加青年として来日したことから、大変親日知的であり、特に、ホストのMr. Ismailはバリ・富士山交流基金の代表として、日本の国際交流基金から援助を受け、日本の文化（インドネシア女性による着物コンテスト、茶道、華道、琴など）の紹介をして新聞にも大々的に取り上げられている。

＊ホストの両親、特に父親と話すチャンスがあったが、私と話すときに、知る限りの日本語を思いだし思いだし涙を流しながら、オイ！コラ！ワタシハ……と話す時、また、戦時中の歌を歌うとき、どれだけのご苦労があったのかなんともいえない気持ちであった。

＊今回の滞在を通じて、ホストは勿論のこと、同居する家族皆の心温まる世話と気配りには心から感謝する次第である。

★　②堀　俊郎

イ．受入れ家庭とその家族構成

◎ホ　ス　ト：R.Anne Agustiame.S.（Ｆ．３３歳）

１９９２年教員グループで来日

＊職業：Sma Negeri I Depok （デポック県第一高等高校・美術教論）

＊勤務先住所：Jl.Nusantara No.317 Perumnas Depok 16432

＊自宅住所　：Jl.Tembaga No.30 Jakalta 10640

〔但し、２／４～５の１泊は、ホスト及び受入れ家庭の都合により、大西留美本調査団員のホームステイ先であるMs. Ayu宅にお世話になった。詳細は後述する。〕

◎受入れ主体者：Lindri Tyasneki（F．３０歳）

＊職　業　：Employee Relation Manager Standard Chartered Bank
（スタンダード・チャータード銀行・職員担当部長）

＊自宅住所：Jl.Sawah Barat Kav 0/No.15 Duren Sawit,Jakalta Timur

◎家族構成：Kobi Tedjasukmana （M．夫・文部省＝国立インドネシア大学勤務）

◎ホストと受入れ家庭との関係：ホストの夫である調査・技術省に勤務するタンガル氏の妹夫婦である家庭で、英語が大変じょうずであることから受け入れていただいた。また、滞在中はホストのMs.Anneさんと娘Ms.Tianさんも同居し、昼間のプログラムにもホストのMs.Anneさん共に同行して世話して下さった。

◎宗　教：イスラム教

ロ．住まいと食事の内容

◎住まい：

＊ジャカルタ市内中心部より約２０キロメートル、車で約１時間（朝夕の混雑時には約２時間もかかる）ほど行ったジャカルタ市郊外の住宅地で、白い平屋の一戸建住宅である。

＊建物の内部は、中央が３０畳以上のオープンスペースで居間を兼ねており、それを囲むように４部屋の個室と台所がある。また、居間の周りの一部が庭のようになっており、その庭の部分の天井はオープンで吹き抜けになっているので大変風通しがよく、床はタイル張りで家にいる間は、スリッパで行動した。

＊４部屋のうち１部屋（トイレ付きの８畳の部屋にベッドと備え付きの洋服ダンスからなる部屋）を滞在中、客室として提供していただいた。

＊使用人１人に日本車２台を所有しており、中産階級の上ぐらいの家庭である。

◎食事　：

＊朝食はインドネシア風炒め御飯（ナシゴレン）にインドネシア紅茶。夕食は、魚や鳥肉などの炒め物が４～５品ほど並べられ、各自の皿に白御飯とそれらのおかずを盛り合せて食した。

＊一般には、手を使って食事するときいていたが、この家庭ではナイフとフォークを使っていた。

＊味付けは、どの料理も多少辛めであったが、御飯も日本のものと大変にかよっており親近感を覚えたため、改めて日本食が恋しくなることは一度もなかった。

＊最後の晩の夕食時は、家族とホストの家族も加えて皆でジャカルタ中心部のレストランに行ってステーキを御馳走になった。

ハ．体験と感想

◎体　験：

＊客室に設置されていたトイレは、まさにインドネシア特有の水槽とヒシャク（柄杓）であり、少し戸惑ったが、トイレットペーパーを準備していて下さったので助かった。

＊家族は皆イスラム教であったが、今回のホームステイ滞在中はそれほど日常的に宗教を感じることはなかった。

◎感　想：

＊ホスト以外は皆英語ができたので不自由を感じることはなかった。特に、Ms. Anneさん及び受入れ家庭のMs. Lindriさんには、わさわざ仕事を休み世話をしていただき、また費用面でも殆ど世話になり、感謝してもしきれないほどであった。持参したお土産以上のお土産をいただいて帰国した。

＊特に、ホストのMs. Anneさんは、日本でホームステイを体験した際に大変親切にしていただいたことから、私に対して大変優しい気配りと心配りをして下さったことに重ねて心から感謝したい。

★　③秋本　武史

イ．受入れ家庭とその家族構成

◎ホ　ス　ト：Heriyanto Saliman（Ｍ．３５歳）

１９９２年勤労青年グループで来日

＊職　業：Japanese Speaking Guide,Tutor of Travel & Tourism Institute

(MENPORA、在ジャカルタ市内ヒルトンホテル及び旅行関係専門学校での日本語講師)

＊勤務先住所：Jl.Gerbang Pemuda Mo.3 Senayan Jakalta 1027

◎受入れ主体者：Frans J. Dharudyo　（Ｍ．４８歳）

＊職　業：Buana Minggu（新聞社勤務）

＊勤務先住所：Jl.Tanah Abang 11/33 Jakarta Pusat

＊自宅住所　：Jl.Cibubur 1/62 Rt.0013/Rw.01 Cibubur,Jakarta Timur

◎家族構成：Maria　（Ｆ．妻　・主婦）

Sonya　（Ｆ．長女・専門学校生、ホストの旅行専門学校の生徒）

Marisa　（Ｆ．次女・高校生）

Marinus　（Ｍ．長男・中学生）

◎ホストと受入れ家庭との関係：ホストは６年前に婦人を亡くしたため、ホストが日本語を教える生徒の家庭が主たる受入れ家庭となった。

また、Mr.Heriyanto及びMr.Franc共に移動の際に乗用車を所有していないことからホームステイ期間中、長女Ms.Sonyaのフィアンセ（Mr.Yudu、専門学校生）同泊して受入れに協力をしてくれた。

◎宗　教：キリスト教

ロ．住まいと食事の内容

◎住まい：

＊ジャカルタ市内中心部から東南に直線距離で２５キロメートル、車で約１時間（朝夕の混雑時には約２時間半もかかる）のジャカルタ市内の一番外れで坂の中腹にあたる一戸建ての家。

＊庭も駐車場もない家であったが６畳ほどのゲストルームを準備して提供してくれたが、多分夫婦の寝室と思われる部屋であった。

◎食　事：

＊特別な食事を準備しないよう最初にお願いしたので、彼等の日常的な食事で白い御飯とインドネシアのおかず２品が毎食提供された。

特に、２日目の朝食時には、台所にある野菜類でチャーハン（炒飯）を作って家族に食べてもらったが、大変おいしかったと食べてくれたことには大変嬉しい一コマであった。また、先にも述べたように受入れ家庭全員の宗教がイスラム教でないことから、毎晩嫌がられずビールを飲むことができた。

ハ．体験と感想

◎体　験：

＊ホストファミリー宅の近くの屋台の並び通りに、ミクロレット（日本での白タクの一種）に乗ってサテ（長い串に刺した焼き鳥）やお菓子を買いに行き、外人など見たことがないという人達と出会って、話ができたことは非常に幸運であった。

＊ホストファミリーの長女とそのフィアンセとで終日ジャカルタ市内を散策したり、映画を見たり、ショッピングするなどしたことや、屋台での食事や夜の町を徘徊してジャカルタの若者の生活を体験することができたことは、飾らないホストのプログラムであったと感謝している。

◎感　想：

＊言葉については、ホストのMr.Salimanが日本語会話の先生であることから、日本語でコミュニケートできるものと思っていたが、なぜかこれが本当に日本語講師であるのか、日常会話が殆ど通じずかえってノイローゼになってしまった。

しかし、主に受入れに協力してくれたMr.Fransやその家族が英語を話せることか

ら、彼等とは日本語でなく英語きコミュニケートすることができた。

＊主に受入れに協力してくれたMr.Frans氏は、月給250,000ルピア（Ｒｐ）で日本円に換算すると約16,000円で家族５人を養い、しかも、子供３人を中・高等学校に通学させていることから、生活はけっして裕福ではないと思われた。しかし、そうした家庭環境の中で、見ず知らずの日本人である小生に対し、心温まるもてなしをして下さったことに心から感謝したい。

★ ④松本　圭司

イ．受入れ家庭とその家族構成

◎ホ　ス　ト：Muhdi Agustianto（M.　　歳）

１９９２年勤労青年グループで来日

＊職　業：

＊自宅住所：Jl.Pejaten Bart II No.22 Kel.Pasar Minggu-Jakalta Selatan

◎宗　教：イスラム教

★ ⑤大西　留美

イ．受入れ家庭とその家族構成

◎ホ　ス　ト：G.A.Ayu Pramitasari（F.　歳）

１９９２年学生グループで来日

＊職　業：バンドン大学生

＊自宅住所：Komplek DPR RI IV No.34 Meruya Selatan Jakalta Selatan

◎家族構成：　　（M．父・国家地方行政庁勤務）

（F．母・内閣官房室勤務）

その他３人の従兄弟の計６人家族

◎宗　教：ヒンドゥー教

ロ．住まいと食事の内容

◎住まい：

＊ジャカルタ市内中心部より西へ車で約１時間程行った郊外の住宅地に位置する２階建の官舎

＊バスルームは共同使用で、車２台所有

◎食　事：

＊昼食は麺をゆでたもので、夕食は魚や鳥肉などの炒めものが４～５皿ほどでて、各自めいめい皿に取り分けて、白い御飯といっしょにフォークとナイフで食した。

(2) 提　言

①本事業への評価：日本来日した青年たちが帰国直前に実施する日本滞在中の評価は行われており、プログラム策定のための成果は上がっている。

しかし、本当の事業の評価としては、来日青年が帰国後一定期間を経た後、彼等の生き方や日常の活動の中で日本滞在経験がどのように生かされているのか、また、生かそうとしているのかなど帰国後の青年調査（フォローアップ／アンケート調査など）を行うことが必要であると感じた。

②本事業が日本理解とともに日本の理解者を増やすことにもあると思われるならば、アジアの近隣諸国の青年を日本に招へいすることは、そのことの第一歩であり帰国後の彼等に対するフォローアップが重要であることは言うまでもないことである。従って、今後は帰国青年を中心に活動している各国同窓会への活動支援を活発化させることが重要であると考える。

③最後に、本アフターケアー調査団の在り方について再考しなければならない時期にきていると考える。

なぜならば、相手国側が何のために訪問しているのか理解が図られていないこと。

また、セミナーと称して集められた帰国青年が、我々調査団と何を話すべきか理解が図られていない（毎年同じようなグループ＝調査団が訪問して、日本への注文や帰国後のフォローアップに対する注文をだしてはいるものの、はかばかしい結果や結論が導き出されていないことから、食傷気味になっている。）

従って、今後はアセアン各国の帰国青年に対するフォローアップと連携させた内容の派遣方法を検討されるよう希望する。

マ　レ　イ　シ　ア

平成５年２月４日～２月１３日

社団法人　青年海外協力協会

Ⅰ　調 査 目 的

1．調 査 目 的

ＪＯＣＡでは１９８５年より昨年までの８年間に、通算６回マレイシア青年を受け入れてきた。（農村青年５回、社会福祉１回）

第一回めの受け入れでは、青年から食事やホテルに関わる不満が出され、当時のプログラムコーディネーターやＪＩＣＡコーディネーターが苦労した話を伝え聞いてきる。これらは、当協会依頼の旅行業者がマレイシアを訪問し、受入態勢の改善に協力いただいたお陰で、食・住に関する問題は大方クリアされた。第二フェーズに入った最近２年間の受け入れでは、検討課題がプログラム内容（訪問先・講義等）に移ってきている。具体的には、青年の期待とこちらが意図した訪問先がかみ合わない、来日青年の職業の広がりに準備したプログラムが対応できない等である。これは、来日青年リストが届く以前にプログラムを作成せねばならないことにも由来するが、当方の情報不足もあげられる。

そこで、今回の調査の第一目的として、農業・社会福祉といった分野の招へいに対する具体的な希望（訪問見学先）・これまでのＪＯＣＡプログラムの改善点等に焦点をしぼり、同窓会青年の意見を求めることにした。

第二の目的は、ホストファミリーを含めた地方プログラムの受入れ担当者が、マレイシアの社会・文化・経済事情の理解を深め、今後のプログラムに役立ててもらうこと。

第三に、帰国青年との交流を通して、職場での活動状況とＰＡＭＡＪＡの活動状況を把握すること。最後に、ＪＩＣＡ専門家と青年海外協力隊隊員の活動現場の視察し、日本の海外協力の理解を図ることである。

2．調 査 内 容

予定行事

・表　敬　訪　問　：マレイシア人事院、在マレイシア日本大使館、
　　ＪＩＣＡマレイシア事務所

・帰国青年職場訪問：ＳＩＲＩＭ
　　（Standards and Industrial Research Institute of Malaysia ）

・青年海外協力隊員：内務省麻薬患者更生施設（Pusat Scrnti Tampin）
　活動現場訪問

・ホームステイ：ランカウイ島

3．調 査 団 員

別紙表Ｉ－１参照のこと

Ｉ－３．調査団員

	氏　名	生年月日	性別	住　所　：　所　属
チームリーダー	相沢　茂樹	S23. 9. 2 ４４才	男	山形県山形市飯塚町1935 山形県青年海外協力協会会長 （地方プログラム実務担当）
メンバー	城戸口　方	S21.10. 3 ４６才	男	山形県山形市古舘237番地 浅間産業株式会社山形工場 （ホストファミリー代表）
メンバー	大江　保弘	S26. 9.30 ４１才	男	東京都世田谷区祖師谷2-5-4-104 （財）日本武道館 （共通プログラム担当）
メンバー	滝口　芳郎	S32. 6.15 ３５才	男	山形県東根市野川138-2 山形県青年海外協力協会 （自営：たきぐち果樹園 地方ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ　実務担当、ﾎｽﾄﾌｧﾐﾘｰ）
メンバー	吉田　宏美	S35. 8.29 ３２才	女	東京都足立区足立4-16-11　ｺｰﾎﾟﾀｲﾑﾌｪｱ 302 （社）青年海外協力協会　職員 （プログラムコーディネイター）

Ⅱ 調査結果

1．2．調査日程及び主要面談者

日順	日	時	業務内容及び訪問先	主要面談者
1	2/4（木）	9:45	成田発（JAL721）	
		16:25	クアラルンプール着	
		17:00	日程打ち合せ （於：空港内喫茶店）	・草野忠征　ＪＩＣＡ事務所次長 ・Chik Omar Chik Lim President of PAMAJA ・Mokhtar Sulaiman Vice President of PAMAJA ・Rosita Bt. Rahim Assistant Director of PSD ・Wan Radhiah Marzuki Public Service Dept. ・他PAMAJA メンバー　５名
		20:00	歓迎夕食会 （於：レストラン　エデン） ＊ Holiday Inn On the Park 泊	・草野忠征　ＪＩＣＡ事務所次長 ・Chik Omar Chik Lim President of PAMAJA ・Mokhtar Sulaiman Vice President of PAMAJA ・PAMAJAメンバー　３名
2	2/5（金）	9:30	ＪＩＣＡマレイシア事務所訪問	・小泉純作　ＪＩＣＡ事務所所長 ・草野忠征　ＪＩＣＡ事務所次長
		10:30	マレイシア人事院訪問 （Public Service Department）	・Abdul Aziz Yusof Deputy Director of PSD ・Md. Solchan Omar Assistant Director of PSD ・Rosita Bt. Rahim Assistant Director of PSD ・Wan Radhiah Marzuki Public Service Dept. ・Chik Omar Chik Lim President of PAMAJA ・Mokhtar Sulaiman Vice President of PAMAJA ・草野忠征　ＪＩＣＡ事務所次長
		12:00	昼食（於：ホテル内レストラン）	
		15:00	ＳＩＲＩＭ見学 (Standards and Industrial Research Institute of Malaysia) ＊ Holiday Inn On the Park 泊	・Yahaya Bin Ahmad Head of Advanced Manufacturing Technology Center ・PAMAJAメンバー　以下２名 Mokhtar Sulaiman Md Solchan Omar

日順	日	時	業務内容及び訪問先	主要面談者
3	2/6（土）	9:30	農業公園見学 （Agricultural Park）	・Chik Omar Chik Lim President of PAMAJA ・PAMAJAメンバー 以下３名 Zabidi Bin Dun Abd Rahim Hashim Mokhtar Sulai
		12:00	シャー・アラム（ﾌﾞﾙｰﾓｽｸ）見学 (Shah Alam)	
		13:00	昼食（於：シーフードレストラン）	
		15:00	国立博物館見学 (National Museum)	
			＊ Holiday Inn On the Park 泊	
4	2/7（日）	9:00	マラッカへ移動	・Abdul Rahman Abdul Razak Commitee Member of PAMAJA
		10:00	マンティン華人日治蒙冤記念碑訪問	
		11:00	セレンバン州手工芸館見学 (Handicraft Complex, Seremban)	
		12:00	胡蝶山荘見学	
		14:00	昼食（於：ｶﾝﾄﾘｰﾘｿﾞｰﾄ 内ﾚｽﾄﾗﾝ）	
		15:00	マラッカ中国人街見学	
		20:00	ｾﾚﾝﾊﾞﾝ地区PAMAJAﾒﾝﾊﾞｰとの夕食会 （於：Tasek Inn 内レストラン）	・Mohd Azmi Mohd Noor Chairman of Negeri Sembilan ・Abdul Rahman Abdul Razak Commitee Member of PAMAJA ・PAMAJAメンバー 他１３名
			＊ Tasak Inn Seremban 泊	
5	2/8（月）	9:00	内務省麻薬患者厚生センター視察 (Pusat Serenti Tampin)	・Chong Deputy Commandant ・Mohd Azmi Mohd Noor Chairman of Negeri Sembilan ・Abdul Rahman Abdul Razak Commitee Member of PAMAJA ・PAMAJAメンバー 他２名
		14:30	ランカウイ島へ移動(MH1446) (Landkawi Island)	・Iskandar Noor Ibrahim Treasurer of PAMAJA
		15:30	ランカウイ島到着	

日順	日　時	業務内容及び訪問先	主要面談者
5	2/8（月）　17:00	スケジュール打合せ （於：Delima Inn Resort ｶﾌｪﾃﾘｱ）	・Iskandar Noor Ibrahim Treasurer of PAMAJA ・Mohamad Fissol Bin Emby PAMAJA Member ・Ramizi B. Hasan Langkawi Development Authority
	20:00	夕食会（於：ﾚｽﾄﾗﾝ Haji Ramli）	同　上
		＊　Delima Inn Resort 泊	
6	2/9（火）　9:00	ランカウイ島内見学 Makan Mahsuri の墓 Datai Area Tangjung Rhu Beach（浜辺） Air Hangat　（温泉）	・Iskandar Noor Treasurer of PAMAJA ・Mohamad Fissol PAMAJA Member
	12:30	昼食（於：Kuah Town 内ﾚｽﾄﾗﾝ）	同　上
	15:00	ケダ大理石工場見学 (Kedah Marble Factory)	
	16:30	ホームステイ家族との対面 (Kampong Wang Tok Rendong)	
	18:00	Wang Tok Rendong 村青年との スポーツ交流（セパタクロウ）	同　上 Wang Tok Rendong 村青年
	20:30	歓迎夕食会 （於：Wang Tok Rendong 村長宅）	〃
	10:30	夜釣り	〃
		＊ホームステイ泊	
7	2/10（火）	各ホームステイ先でのプログラム	
	15:00	村長宅集合　飛行場へ移動	
	17:25	クアラルンプールへ移動(MH1453)	
	18:25	クアラルンプール到着	
	20:00	夕食（於：ﾚｽﾄﾗﾝ Marble Arch）	
		＊ Hotel Grand Continental	

日順	日　時	業務内容及び訪問先	主要面談者
8	2/11（水）10:00	先住民資料館見学	・Iskandar Noor Ibrahim Treasurer of PAMAJA
	11:30	ゲンティン高原見学 (Genting Highland)	
	14:00	昼食（於：ホテル内レストラン）	
	21:00	送別会 （於：Kelana Sea Food Paradise）	・Mahamad Zabri Bin Min Director General of PSD ・Abd Aziz Mohd Yusof Deputy Director of PSD ・草野忠征　ＪＩＣＡ事務所次長 ・PAMAJAメンバー　約５０人
		＊ Holiday Inn on the Park　泊	
9	2/12（金）9:00	在マレイシア日本大使館表敬訪問	・原田美智雄　二等書記官 ・草野忠征　ＪＩＣＡ事務所次長
		自由行動	
		＊ Holiday Inn on the Park泊	
１０	2/13（土）8:00	スバン国際空港へ移動	・Chik Omar Chik Lim President of PAMAJA ・Wan Radhiah Marzuki Public Service Dept. ・Ismail Awang PAMAJA Member ・草野忠征　ＪＩＣＡ事務所次長
	10:45	香港へ出発（CX720）	
	14:20	香港到着～トランジット～	
	16:45	成田へ出発（CX500）	
	21:15	成田到着	

3．調査結果概要

まず第一に、マレイシアにおいて青年招へい事業が大きく評価され、かつ、当事業に興味を寄せる若者が多いということが解った。さらに、帰国した青年たちとの再会・家庭訪問等から、彼らが日本での体験を職場の同僚や友人・家族に話し伝え、経験を分かち合っている様子も伺い知ることができた。また、ＰＡＭＡＪＡの活動を知ることも、アフターケア調査目的のひとつであったが、ＰＡＭＡＪＡが単なる同窓会の集まりではなく、積極的に独自の活動を展開していることを実際目にしたことは、大きな収穫であった。

また、帰国青年の職場（ＳＩＲＩＭ）と青年海外協力隊員の活動現場（麻薬患者更生施設）の訪問により、工業国の仲間入りを果たそうとする国を上げての意気込み（理想）と、多くの若者をむしばんでいる最大の問題（現実）という、マレイシアの表裏を知る機会に恵まれた。さらに、ランカウイ島でのホームステイにより、都市部のホテル滞在では決して求められない心のやすらぎと、受け入れ家庭での貴重な体験を得ることが出来た。

唯一の心残りは、調査の第一目的であったＪＯＣＡプログラムへの意見・助言を青年から聞きだすことが難しく、大方は感謝の言葉しか出されなかったことである。食卓を囲んだ和やかな雰囲気にはふさわしくないと判断されたのか、プログラム内容へと水を向けてみても、なかなか本音を聞くことが出来なかったのは残念である。交流・交歓会に加え、建設的な意味での意見交換の場を設定しても良かったように思える。

しかし、今回の調査訪問を機に今年度からの受け入れ（都内・地方プログラム、武道鑑賞）は、マレイシア青年という大枠から○△州○×村の青年のためのプログラムという具合に、より親近感を持って計画実行されることは間違いない。

4．現地調査・活動内容結果

(1) 訪問先における意見交換内容

①ＪＩＣＡマレイシア事務所

日　時：２月５日（金）　午前

面談者：小泉純作　所長

草野忠征　次長

小泉所長より、マレイシア全般についてのブリーフィングを受ける。

首都クアラルンプールは、緑多い近代都市であり近隣諸国に比べ比較的治安も良い。しかし、観光地としての評判はインドネシアやタイに押され、いまひとつの状態である。政府は１９９４年（来年）をマレイシア観光年（Visit Malaysia Year '94）と定め、大々的な観光客誘致宣伝を繰り広げている。そのため、現在も高層ビルやゴルフコース等の建設ラッシュが続いている。

さらに、「２０２０」(duapuluh duapuluh）と呼ばれる、２０２０年までに工業国の仲間入りを果たそうという大きな国家目標を掲げている。その具体策として、在マレイシア外資系企業の下請けを担う地方中小企業の育成が図られている。そのリーダーシップを果たすべく、マレイシア工業規格研究所(通称ＳＩＲＩＭ；Standards and Industrial Research Institute of Malaysia）が創設され、工業製品の規格化と品質管理が行われている。

現在ＳＩＲＩＭには、ＪＩＣＡ専門家が５名入って協力活動を行っている。

②マレイシア人事院（Public Service Department）

日　時：２月５日（金）午前

面談者：Mr. Abdul Aziz Yusof　Deputy Director

Ms. Rosita Bt. Rahim　Assistat Director

Mr. Md. Solehan Omar　Assistat Director

Ms. Wan Radhiah Marzuki

今年度をもって青年招へい事業の第二フェーズは終了するが、宮沢首相の訪問を機に、来年度よりさらに５年間第三フェーズとして事業が継続されることになったと聞いている。マレイシア国内での青年招へい事業に対する評価は高く人々の関心も大きいので、これは大変喜ばしいニュースであり、可能な限り継続してほしい。当事業に関して人事院が抱える問題は、応募者数についてである。これは、応募者が少ないというのでは無く、逆に希望者が多過ぎて人選に苦労しているという点である。

同窓会（ＰＡＭＡＪＡ）活動も活発であり、現在約１３００名の会員がいる。メンバーは国内各地に散らばっているので、各訪問先で何か困ったことがあれば“PAMAJA Member！”と叫べば、必ず誰かが名のり出て助けてくれるはずである。最近の主な活動としては、昨年９月に当地で行ったアジア・ユースフォーラムを成功に導いたことである。(今年はフィリピンで開催）また、この２月１２日から１９日まで、インドネシア・バンドゥンにおいてインドネシア同窓会（ＫＡＰＰＩＪＡ)との総会が予定されており、５０名の会員が参加する。

マレイシアでは、ＴＶ・新聞等のメディアを通して日本のことを知る機会に恵まれており、日本に詳しい人も多いが、逆に日本人がマレイシアを知る機会が少ないように思える。来年は、マレイシア観光年（Visit Malaysia Year '94）でもあり、また、１９９８年には英連邦オリンピック（Commonwealth Olympic）が開催される等、マレイシアを世界に紹介する格好の時期に入っている。今回の訪問を機に、ぜひ当国の文化・習慣等を理解していただきたい。

③ＳＩＲＩＭ（Standards and Industrial Research Institute of Malaysia）内

ＡＭＴＣ（Advanced Manufacturing Technology Center）－セランゴール州シャーアラム

日　時：2月5日（金）午後

面談者：Mr. Yahaya Bin Ahmad

Hend of Advanced Manufacturing Technology Certer, SIRIM

帰国青年の活動現場訪問。研究所の概要説明と案内をしてくださったのが、第一回青年招へい事業参加者のYahaya氏。現在、ＳＩＲＩＭ内のAdvanced Manufacturing Technology Centerの長を務める。

ＳＩＲＩＭはマレイシアの工業化を進める上での、中心的役割を果たす政府研究開発機関として創設された。今回訪問したＡＭＴＣは、ＳＩＲＩＭの傘下にある技術開発研究部門が抱える８つの研究センターのひとつで、１９９０年に設計。地元企業が国際競争に参加でき得るような、新技術の開発と工業用機械の設計、及び外国製最新工業機械の分析等を企業と共同で行っている。さらに、企業やその従業員に対し、技術アドヴァイス・セミナーの開催・短期技術訓練等を提供する他、最新の工業機械を揃え使用方法も指導している。(センター内の各種工業機械は、米・独・英・日の無償援助により設置)研究職員は、米国・韓国・英国・日本にて学んだ人が多いとのこと。

一方、工業製品規格部門では、ＭＳマークというマレイシア版を制定している。(食品等にも使用されている）このＭＳマークにより、国内産製品の品質維持・向上・規格化が図られ、外資系企業への部品の納入の道が開かれたとも言われている。ちなみに、マレイシアと三菱自動車との合弁企業による初の国産車プロトン・サガのドアとハンドル部分の鋳型は、ＳＩＲＩＭで設計・製作されたそうである。

④農業公園（Taman Pertanian Malaysia）－セランゴール州シャーアラム

日　時：2月6日（土）

当公園は、教育・研究・自然資源の保存・娯楽・観光等を目的として、１９８６年に開園した。教育的役割として、都会の子供たちに農業を知ってもらえる様にと、田植えから収穫まで稲作の各階段をひとめで見学出来る田んぼや、果樹園・きのこ館・ラン庭園・昆虫館・動物園・森林保存地区などがある。また。公園の呼びものとしてのTemperate Gardenがあり、人工的に四季を作りだしガラス越しに季節の移り変わりを知ることができる。時期により春夏秋冬の設定が変わり、一番の人気はやはり雪が降り凍て付いた様子が見られる冬らしい。娯楽面では、貸マウンテン・バイクによる約１３００ヘクタールの変化に富んだ園内の散策や、木々に取りつけられたつり橋を渡るジャングル体験などがある。

公園内には、宿泊施設やセミナー会場もあり、青年招へい出発前オリエンテーションの一部も当地で行われているとのこと。

⑤内務省麻薬患者更生センター（Pusat Serenti Tampin）－マラッカ州タンピン

日　時：2月8日（月）

面談者：Mr. Chong　Doputy Commandant

滝沢正充　青年海外協力隊員（自動車整備）

松井孝夫　〃　（溶接）

青年海外協力隊員の活動現場視察として、麻薬患者更生センターを訪問。滝沢・松井両隊員は、同センター内で更生者の職業訓練指導に当たっている。マレイシアの法律では、ある一定量以外の麻薬所持者は死刑と定められているが、年を重ねるごとに麻薬常習者数が増加し、大きな社会問題となっている。

当更生センターは、麻薬常習者を麻薬から切り離し健全な市民に更生するとの目的で、１９８３年に設立された。施設の敷地面積は３４ヘクタール、８００名を収容することが出来る。更生期間は通常２年間であるが、現在は入所者が多いため１５ヶ月間に短縮されている。更生訓練は４段階に分けられ、中毒患者の身につけたＴシャツの色により、その人間がどの更生段階にいるのかが即判別できるようになっている。入所時から３ヶ月間は、赤色。次の４ヶ月間は黄色。続いて緑。出所までの４ヶ月間が白、という具合である。

第一段階（赤Ｔシャツ）では、解毒療法に加え心理面でのカウンセリング・行進訓練等が行われ、規則正しい生活を習慣ずけられる。第二段階（黄色）に入り、職業訓練や宗教・道徳の勉強等、仕事へのノルマや自信をもたせる要素が加わる。第三段階（緑）では、各自に責任が課せられ、施設内を最小の監視のもと移動する許可が与えられる。最終段階（白）は、地域の活動に参加する・施設内を自由に行動できる・より多くの責任が課せられる等、出所への準備期間となる。全段階においてカウンセリングが施され、第二から第四段階では、本人の宗派にあった宗教と道徳の勉強が行われる。職業訓練の具体的な内容は、農業・自動車整備・手工芸・溶接・ラタン家具つくり・絵画・ブラスバンド・ロックバンド・官公庁に納める封筒の糊付け等があり、本人の職業や能力に応じて決められる。

入所者年齢の７５パーセントは１９～２９才で、最年少は１９才、最年長者は４５才。めでたく更生センターを出ても完全に麻薬を断ち切れる人は少なく、約６５パーセントは再びセンターに戻ってきてしまうらしい。麻薬はタイから大量に持ち込まれ容易に手に入る上、センターでのように四六時中監視されることもない。さらに、一般市民の彼らに対する対応も冷たく、社会復帰はかなり難しいとのことである。更生者本人はもちろん、センター職員にとっても並々ならぬ忍耐と根気が要される。

⑥日本大使館

日　時：２月１２日（金）

面談者：原田美智雄　二等書記官

マレイシア滞在の最終日となり、各団員がそれぞれの感想を述べた。

また、１月の宮沢首相のアセアン諸国訪問により、青年招へい事業が第三フェーズとしてさらに５年間継続されることも話題にのぼった。

(2) 帰国青年の同窓会などの活動状況

今回のアフターケア調査では、スケジュールの調整にはじまり、車の手配・ホームステイ・ホテル等、あらゆる面においてＰＡＭＡＪＡのお世話になった。Omar会長をはじめとするメンバーの大半が公務員で、重要なポストにあり多忙であるにもかかわらず、時間をみつけてはプログラムに同行していただいた。訪問各地で青年が我々を持ち受けており、遠方に住む青年からは歓迎の電話をいただくなど、その強力な連携態勢と連絡網には目を見張るものがあった。特にＰＡＭＡＪＡ役員の、昨年９月のアジア・ユースフォーラムを成功させたという、自信が感じられた。ただ、故意か偶然が定かではないが、今回の訪問に際し、中国系・インド系青年の参加がほとんど見られず残念であった。ＰＡＭＡＪＡメンバーではあるものの、その活動に参画していない、あるいは出来ないという印象を受けた。

ＰＡＭＡＪＡの活動内容、９２年度から９４年度までの役員リストは別紙として添付。

(3) 現地でのセミナー、交流会の実施結果

セミナーはなし。

交流会は、訪問初日の歓迎夕食会、セレンバン地区ＰＡＭＡＪＡメンバーとの夕食会、ランカウイ島Wang Tok Rendong村でのスポーツ交流（セパタクロウ）と歓迎夕食会、及びお別れパーティの５回である。３回にわたるＰＡＭＡＪＡメンバーとの食事会では、懐かしい青年たちとの再会もあり、帰国後の彼らの活躍の様子を知ることが出来た。特に、お別れパーティーでは、翌日ＫＡＰＰＩＪＡとの総会に参加するメンバーが出席したため、首都にいながら全国の青年に会うというチャンスに恵まれた。

また、Wang Tok Rendong村の村長宅で行われた歓迎夕食会は、５ホストファミリーを中心に近所の奥さんや若者によって手際よく支度された。イスラムのしきたりに従い男女が別々の部屋に集い、お祈りと村長の講和、Fissol氏による我々調査団一行の紹介と相沢団長の挨拶が続き、夕食が饗された。このような集会は度々開かれるそうで、宗教が生活の中に深く根ざした中で、村人たちの連帯感を高め、心の安らぎを与えるのに大きな役割を果たしている様である。村長やFissol氏の話はマレイ語だったため内容は解らなかったが、なかなか説得力溢れる語りぶりで、話上手というのはリーダーとしての必須課目なのだと改めて感じた。

(4) ホームステイ実施結果

ランカウイ島のWang Tok Rendong村にて、１泊２日に日程でホームステイを体験した。ランカウイは、政府が観光リゾート地として整備を行っており、海岸線に沿って多くのホ

テルやバンガローが立ち並んでいる。我々が訪問した村は、７年前に入植者を迎え新しく作られ、第一回青年招へい参加者のMohamad Fissol氏が地域開発担当官として指導している村でもある。

入植当初は職を持つ人は僅かであったが、現在では勤労可能な村人全員が働いており、前世帯がバイクをまた三世帯は車も所有しているとのこと。村には、３才から６才児までの保育施設及び幼稚園があり、３名の職員が勤務している。費用は１カ月１０リンギット(約５００円)。近所の村から通っている子供も数名いるらしいがが、村の子供の何割が通っているかは不明。村民の信頼関係が成り立っており、村全体が大家族という印象を受けた。日本の田舎とも共通するが、日中は家の扉を開け放しており誰でも自由に出入りすることができる。

詳しくは、別紙の団員感想文参照のこと。

５．調査団所感および提言

「アフターケア・チームに参加して」　　相澤　茂樹

私は、これまで「２１世紀のための友情計画」の地方プログラムをフィリピン農村青年４回、インドネシア教員２回の計６回担当した。合計で１５０名の青年と交流したことになる。

私は、昭和４７年より４９年まで協力隊員としてマレイシア連邦サバ州に柔軟隊員として滞在した経験があるが、この度、このような形で２０年ぶりのマレイシア訪問が出来たことは誠に幸運であり、多くの人々との交流が今後の国際交流を深める貴重な体験となった。

マレイシア到着後、空港ロビーにはＪＩＣＡ草野次長やＰＡＭＡＪＡメンバーより心温まる歓迎を受けただけでなく、忙しい仕事を割いて訪問先へも同行していただき感謝の念にたえない。

今回のアフターケアに参加して、多くの青年との交流、政府機関訪問の中で、この国の教育・産業・環境の行政担当者よりのコメントを直接聞くことができ、２０２０年までに先進諸国の仲間入りを目標に掲げ、民主レベルの生活向上の意欲がひしひしと感じられた。特に、国産車が多く目につき、目標が達成される日もそう遠くないと思われた。

しかし、訪問先への車窓から垣間見られる状況や、近代的なビル群やハイウェーといった都市文明と隣合わせるゴム椰子園で働く人々からは、農産地域の後進性が私の脳裏に映る２０年前のマレイシアと交差して困惑してしまった。また、工場地帯では日本企業が多く、日常生活における自動車、家電製品等は以前よりも多くなっているように思われた。

このように、日本からの経済進出が著しいなか、経済技術援助や多くの協力隊の派遣等で多大の貢献をしていることは、マレイシア側も感謝しているようである。しかし、これからの援助協力は、人的交流や相互理解のための施設を作るとか、もっと教育・文化への貢献といったソフト

面で協力する必要があるのではないかと思われる。

また、ＰＡＭＡＪＡメンバーは、１カ月間の在日経験や留学経験で日本の社会と文化に触れており、帰国後も日本に対して経済交流だけでなく文化交流に対する支援が重要になってきているように思われる。

ホームステイの感想

「２１世紀のための友情計画」の業務に携わり、ホストファミリーの方々の精一杯の誠意に毎回頭の下がる思いをしているので、私達を受け入れて下さる家庭の方々に感謝しつつホームステイ先へ向かった。

今回のホームステイ先はタイとの国境の島、ランカウイ島、リゾート開発が進み、多くの観光客が行き交っており、「これ以上開発が進まないように」と独り言を言いながら、ホストファミリー宅へ向かった。ステイ先は、Wang Tok Rendongという村落開発のモデル地区で約５０戸の村であった。まず村長宅にお邪魔し、ホストファミリーのアジザン氏と対面の後、彼のお宅へ。彼は３３才で公立の自動車整備工場の教師である。奥さんと三人の子供（４才、２才、３カ月）の５人家族で、年齢差はあっても我が家と同じ家族構成である。奥さんも公務員の共稼ぎ夫婦で、上の二人は保育園、下の子供は実家に預け職場へ出勤する。

今回のホームステイは一泊と短時間であったが、主人は、今日は私のために「朝、ちょっと職場へ行ってすぐ帰って来る」と言って３カ月の子供を私に預け出勤して行った。が、帰ってきたのが３時間後で、その間私はベビーシッターをしていたのである。これも互いの国際協力かな！

最後に、このプログラムを担当してくれたＰＡＭＡＪＡ（同窓会）の組織力・行動力ともに、かなり実力があり、また、人事院が側面から支援をしていることもあり、活発に活動しているのには驚かされた。これはLook East政策をより推進させるものと考えられるが、ＰＡＭＡＪＡメンバーは招へい事業で来日した青年だけでなく、日本への留学経験者、もしくはこの活動に関心のある者は入会できることもLook Eastの一環であると思う。日本的に考える同窓会のイメージでははくＰＡＭＡＪＡを基盤として、日本との交流を強固なものにする可能性を秘めていると思われる。

今回交流したＰＡＭＡＪＡメンバーには、中国系の青年が一人もいなく多民族国家の難しさが垣間見られたが、いたしかたないことと思う。ブミプトラ（マレイ人優先政策）が優先することと思われるが、もし少し寛大な気持ちで選考して頂くようにマレイシア政府に要望していけば、日本人に対しても多民族国家としての理解度が進むのではないだろうか。

「２１世紀のための友情計画」を今後更に効果的に発展させ、来日を機に芽生えた日マ交流をさらに強固なものにするには、日本側においても交流の窓口を持つ団体の組織化が必要ではないだろうか。

最後にひとつの提案をさせて頂きたい。

今年度は、アフリカチームも来日するとのことであるが、来日する青年の国に滞在の経験がある

協力隊ＯＢを日本側の交流窓口としてはいかがだろうか。

「２１世紀のための友情計画」のさらなるご発展をお祈りする次第である。

「サヤ　タッ　ルパカン　アンダ　テリマカセ　マレイシア」　　城戸口　方

２月３日夜、山形は真冬。コートを着、厚着をして仙台へ向かい、午後１０時４０分に成田へ向けてリムジンバスが出発した。成田空港第二ターミナルに、午前５時３０分到着。
草々ＪＯＣＡの木村さんはじめ、アフターケアチームで団結式を行い、ＪＬ２７１便にて一路マレイシアへ。

フィリピンの火山噴火の為、台湾を経由し２５分遅れてクアラルンプールに到着。機内アナウンスによると、気温は３２度とのこと。コートを脱ぎ捨てても、まだ暑い。真冬の山形から出て来て７時間そこそこで３２度の暑さは、私にはとてもつらく感じ、１０日間の日程がちょっと心配になった。そんな事を思っている間に、同窓会メンバーが出迎え歓迎してくれる。まずは、一服と、マンゴージュースを飲みほし、南国の味に満足感を覚える。

翌日より、アフターケアプログラムが始まる。国際協力事業団クアラルンプール事務所訪問、小泉所長と会う。２０２０年に向かい、韓国・日本に追いつけ、追い抜けのスローガンで日々努力しているとのこと。人事院表敬では、青年招へいの参加希望者が多く選抜が大変であること、来年より招へい事業が三期目に入ること、これからも当事業を続けてほしいこと等を伺った。また、パマジャの活動が大変活発であることを知る。インドネシア、マレイシアの両同窓会が、第一回総会を２月１３日にインドネシアで開催するとのことであった。

マレイシアの国産自動車、ＮＩＥＳ、新興工業経済地域という言葉がよく使われる。韓国、台湾、シンガポールのほかにマレイシアもはいっている。特にマレイシアは、天然ガスや石油などの資源に恵まれており、将来を嘱望されているようだ。国産自動車の名前はプラトンサガ(Praton Saga)。私も乗せてもらったが、なかなか乗り心地が良かった。１３００ＣＣから１５００ＣＣで、今年三度目のモデルチェンジをするとのことである。しかし、一般庶民にはまだまだ高嶺の花といったところ。それでも日本車と比べれば、数千ドル安いとのこと。人気のほうは、日本製の輸入車を買うのが夢という。

私はＫＬ地区を車で移動中、オラン・アスリと呼ばれる先住民族、マレイ人、中国・インド系の混在する多民族社会を見、また、いたる所に高層ビルの工場現場を見る事が出来た。

いよいよホームステイの地、ランカウイ島である。ＫＬから空路、ランカウイ空港まで４０分。豊かで美しい自然が息づく島、酒とタバコは無税となっており安く買えるとのこと。ホテル到着後、草々水着に着替え日光浴を楽しむ。やっぱり、ヤシの木々が絵になる。カメラのシヤッターを何度も何度も押し続ける。夜は、地元のパマジャメンバーの方々とシーフードレストランにて夕食。明日は楽しみしているホームステイである。私は、２１世紀のための友情計画の地方プロ

グラムで、インドネシア・フィリピンの２ヶ国の青年を計４回ホストファミリーとして受け入れているので、ホームステイを外国でするのがひとつの憧れでもあった。車で、私が泊まる所まで送ってもらい周りを見まわすと、山々があり緑が濃く、なんとなく私が生まれ育った所と似ており安堵感がある。待ちに待ったように子供たちが寄ってきて、遠回しに私達を迎えてくれているようだ。ここなら何日でもいられると思った。私がお世話になるアブドーラさんが家まで案内してくれる。８人家族とのこと。父母が迎えてくれた。暑かっただろう！水浴（マンディ）をどうぞと勧められ、よろこんでマンディをする。なんと暑い国にふさわしく、水槽より、バケツで水を汲み頭からざんぶりかぶる。こんなに気分がよいマンディを、今までしたことがあっただろうか。さっぱりとした後で、外庭にある食卓でスター・フルーツジュースをごちそうになり、一人一人と自己紹介をし家族全員と顔をあわせる。近くのグランドでサッカーをしている所までジャラン・ジャラン（散歩）し、子供たちが自己紹介。私が学生のころ、一番最初に習った英語の時のように、４才から５才の子供たちが一人一人名前を言ってくれた。この子供たちが、２１世紀の平和社会の創造に向けて動きだしている力強さが感じられた。

テレマカシーサヤ　タッ　ルパカン　アンダ　アブドーラさん

（ありがとう、あなたの事は忘れません）

最後に、私達の受け入れをして下さった同窓会の方々、ＪＩＣＡの皆さん、自分達の時間をさいていただき、本当に感謝するばかりである。また、多くのマレイシアの方々と会い、彼らの親切な人情味に触れ、今まで抱いていたマレイシアに対するイメージが広がっていくのを感じた。今後も、よりよい理解を深めこの青年招へい事業によって、日本とアジア各国の友情関係を少しでも理解しあい好転することを願い、もっともっと私自信も学ばなければならないと思った。

「アフターケアを終えて」　　大江　保弘

平成４年４月１日、私は職場内の配属変えで、アセアン青年招へい事業の武道観賞を担当する課に配属された。配属後、早速のアフターケア調査チームとしてマレイシアへの派遣であった。

貴重な体験を通じて得るところが多かったが、何よりも、招へいされて来る人々は一体、どんな国から来るのか、その一端を実際に見る事が出来ただけでも、大いに今後の役に立つと思う。武道観賞という限られた時間ではあるが、従来よりは交流と理解が深まると思っている。

私の睡眠時間は平均６～７時間である。これとほぼ同じ時間のフライトでマレイシアに着く。言語、習慣、気候が全く違う国である。まさに「地球は狭くなった」。

今でに何度か、いわゆるパッケージツアーで海外に行ったが、ほとんどが空港、ホテル、観光地の行ったり来たりであった。今回もホテルのロビーでパッケージツアーらしいグループの一員が、添乗員に何か我が儘な要求をしているところを目にした。こちらも１０日間しか滞在しないのに、彼等と比較すべくもないが、真の交流とは何かを考えさせられる要因になった。

私はアルコールが好きである。しかし、マレイシア人でイスラム教の人々は、酒を一切口にしない。すくなくとも、私は彼等が酒を飲むところを目撃しなかった。何度か催された交流会や懇親会でもアルコール抜きであった。ある時、パマジャの主だった方々とだけの夕食会があった。この時、私はシビレを切らして、同じ派遣団員にそっと「もう飲んでも良いでしょう」と耳打ちをした。しかし、彼は「彼等が同席している以上、控えるのが礼儀」と私をたしなめた。これ以降、私は何度か彼からアドバイスをしてもらうことになった。

マレイシアで様々な体験をしているうちに、日程も７日目を迎え、この日の午後にはいよいよホームステイ先があるランカウイ島に入った。

この日の夕食は、我々団員とホームステイ先の家族の方々、そしてパマジャ・メンバーと共にすることになった。夕食の準備というのは、どこの国でも楽しいものであり、ここでもファミリーの女性総出で準備する様を楽しんだ。どんな料理が出来上がるのかも、楽しみであった。気がつくと、成人の男子がいつの間にかいなくなっていた。聞いてみると、今日は礼拝の日であるとのことであった。長い夕食の準備が終わり、外もすっかり暗くなった頃、礼拝を終えた人々が続々と夕食会の場所に集まって来た。早速、食事かなと思うとその場で礼拝が始まった。仕方なしに、我々は部屋の隅で礼拝が終わるのを待つことになるのだが、それがなかなか終わらないのである。日本では、客を第一優先するという習慣に慣れていた私は、あまりの長さに嫌悪すら感じ他の団員が平然としている顔を横目に、そっとその部屋を出ることにした。外に出てみると、星明りの中で若者達が、サテの準備をしていたので、しばらくこれに加わることにした。様子を見に部屋へそっと戻ると、礼拝はまだ続いていたのである。いよいよ食事が運ばれて来たが、長老らしき人の所から先に用意された。部屋の隅にいた我々は、ほどんど最後であった。他の団員は皆と同じ様に、手ですくって食べていたが、思い出してみればささやかな抵抗のつもりだったのか、私はスプーンで食べた。その後は、ホームステイ先で眠れるかどうか心配であったが、密かに持っていたウイスキーを少々大目に口に含み寝た。翌日は、高原の朝のように素晴らしい晴天の朝だった。

折りにふれ、私に適切なアドバイスをしてくれた団員の方は、バングラデシュで３年間青年海外協力隊員として活躍され、現在もホストファミリーとして活躍なさっている。他人に迷惑をかけなければ何をしてもいいという個人主義では、この事業に参加できないし、相手の文化や習慣に理解を示すことが出来ないと、真の交流にも及ばない事になる。招待を受けている方は、用意されている物を有り難く頂戴するのが礼儀であるし、客だからといって特別扱いせず、普段のスタイルのままで迎えるのも、本当の交流と理解が生まれる良い方法であることは、日本も同じであった。

私は今まで僅かな期間しかこの事業に関わっていないが、国際協力事業団をはじめ、青年海外協力協会および協力隊員、現地政府の窓口の方々、そしてパマジャ・メンバーの長年の努力と尽力によって、今日の交流が築かれていることを知った。

「マレイシア滞在１０日間を通して」　　滝口　芳郎

山形県青年海外協力協会は、フィリピン、インドネシア青年の受入の経験はあるものの、今回のアフターケア調査対象となったマレイシアは、今までに直接の関わりのない国である。
私個人の経験においても、今回が初めてのマレイシアとの出会いであった。

私は、青年海外協力隊員ＯＢで、バングラデシュで３年間（'81～'84）生活した経験を持っている。バングラデシュもイスラム国であり、自分なりのイスラム国観を持っていたつもりだった。イスラムの戒律……我々日本人には到底理解することの出来ないカリスマ的な宗教論理が、イスラム国の原動力であり、イスラム独自の文化・社会を形成し、独自の社会、経済発展を目指している国、それがイスラムの国だと思っていた。逆に言えば、女性の社会進出、異教徒・異文化との協調と融合……日本的近代化の「足かせ」にさえなっている。語弊があるかもしれないが、イスラム国における近代化－いわゆる日本的な近代化－は、有り得ないものと思っていた。

それが、２０２０年までに先進国の仲間入り（現在の日本）を目標とし、現在、先進国の予備軍として、たんたんと躍動しているイスラムの国マレイシアという国が存在している。それは、私のイスラム国観の崩壊を意味するものだった。

マレイシア、私達の訪ねた様々な職場では、女性－確かに衣装はイスラム式である－が活き活きと働き、町で、村で女性が自由に闊歩している。

朝食は、ルティチャナイとティタレー（インドのパンとカレー、ミルクティ）を食べ、昼にはモスクの前のチャイニーズ・レストランで、平然とコーランを聞きながら中華料理の昼食をとる。それでいて、ゲストを迎える夜には、男女別室でイスラムの拝礼をしマレイ料理を食べる。何も知らなければ、女性の姿、朝食、昼食までは当たり前のことで、ホームステイ先の村で行われた村民あげてのイスラム式歓迎夕食会のほうが、強烈な印象を与えるだろう。そして、また、ホームステイ先のトイレ・風呂場に驚くはずだ。

私は、マレイ語も英語も出来ない。ホームステイ先では、旦那（２９才）が頼んで来てくれた隣に住む郵便局に勤めるおじさんが、「えいご」で通訳してのホストファミリー（若夫婦と幼子二人－２才、１０カ月）との交流だった。が、私がホームステイ先で一番驚いたのは、一泊した次の日の昼食。旦那は仕事に出かけ、子供らは近所に預けたらしい。奥さんの手作りのマレイ料理を、私と奥さんに二人だけで差し向かいで食べたこと。私の今までのイスラム観では、考えられないことだ！女性の社会進出、異教徒・異文化との協調と融合……マレイ系・中国系・インド系の国民が共存し、そしてイスラムをこの国流にアレンジしている。それでいて、イスラムの心を忘れてはいない。この国では、イスラムは宗教（我々が認識できる）であり、国を動かしているのは、日本と同じ政治・経済なのだ。
「こんなイスラムの国もあったんだ。イスラムの国でも、ここまで出来るんだ。」
冒頭にも述べたように、ＰＡＭＡＪＡメンバーと山形県青年海外協力協会との直接的な関係はな

い。にもかかわらず、日本で大変お世話になったのだから当然だと言って、笑顔で接待してくれるＰＡＭＡＪＡメンバー。マレイシアにも日本的義理人情の世界があった。いや、驚愕、感動の１０日間だった。

しかし、こうして帰国して報告書を作成するにあたり、マレイシアに関する資料を見ているうちに、一つの疑問が沸いてきた。現在のマレイシアには、ブミプトラ政策というものが存在し、マレイ系国民が優遇され、他の国民からの不満も存在しているという。事実、今回お世話になったＰＡＭＡＪＡのメンバーも皆マレイ系の青年たちだった。確かに、今回知ることの出来なかったもう一面のマレイシアが存在するのかもしれない。それは、今後の私の課題としよう。私とマレイシアの関係は、今始まったばかりなのだから。

そして、私と同じ年（１９５７年）に生まれた、まだ若くて可能性のある国マレイシアと私の今後の互いの成長を信じて。

「マレイシアで感じたこと」　　吉田　宏美

「マレイシアに来たことがありますか？」－マレイシアを担当したこの２年間、必ず青年から尋ねられた質問である。これはマレイシアに限らず担当するすべての国の青年から、自分の国へ来たことがあるかと聞かれてきた。「まだ行ったことがないのョ。是非、行きたいのだけど…」と答え、その度に自分が担当する国は訪問してみなければ、との意を強くしてきた。
そんな折、アフターケア調査団の一員としてマレイシア訪問の機会を恵まれ、懐かしい青年たちとの再会の約束をも果たすことが出来たのである。

首都クアラルンプールは高層ビルが群立する都会であるが、緑生い茂る街路樹が多く配され、ぶらぶらと歩き回りたくなる様なただずまいをもっている。その町をさらに華やかにしているのが、通りを歩く女性たちである。ピンクや青・黄色と、原色鮮やかなバジュクーロやサリーをまとい優雅に歩くご婦人、スーツ姿の颯爽とした女性。イスラム教を国教とする他の国と比較して、女性が当然の如く男性の中に混じって活躍していることは、大きな驚きであった。また、女性ドライバーや、昔日本でスーパーカブと呼んだバイクに親子三人が（子供を真ん中にはさんで）乗っている姿をよく目にした。日が暮れると町中にイルミネーションが輝き出し、その中には、「２０２０」なる国家目標や「Visit Malaysia Year'94」なる宣伝も見うけられる。午後１０時を過ぎても車の流れは途絶えること無く、町の散歩を楽しむ人々の姿はますます増えてゆく。こうして、首都だけをみれば「本当に海外援助を必要とする国なのだろうか」という疑問にさえ駆られてしまう。

しかし、「総ての民族が共に手をつなごう」とか「麻薬所持者は死刑」なるスローガンが物語る様に、きらびやかな表通りからは伺い知ることの出来ない問題を抱えていることも事実である。この訪問で出会った青年達には（ＰＡＭＡＪＡメンバーに限らず）、何らかの形で本業の他にサイ

ド・ビジネスをしている人が多く、携帯電話やポケットベルを持ち歩き、常にビジネスチャンスをうかがっているという印象を受けた。「なぜ、そんなに仕事をするの？」という愚にもつかない私の質問に、「食べていけないから」との答。不思議なことに、どの青年も本業は適当にこなして、サイド・ビジネスに相当入れ込んでいる様子である。では、どんな仕事だろうか。旅行業者、マレイシアの伝統ダンス教師、ビデオフィルム制作会社、品物の買いつけ業者、タクシーの運転手等々。当然、ひとりで２つ３つの職業を持ち、日本人以上に働く青年もいる。主人と夫人それぞれ自分の車を持ち、職場へ向かうという恵まれたカップルも増えているらしい。それでも、何事も仕事優先の日本人とは異なり、家族や友人との時間を大切にしていることは我々が見習うべき生き方であろう。

今回のアフターケア調査にあたり、ＰＡＭＡＪＡメンバーに大変お世話いただいた。職場においてそれぞれ重要なポストにある彼等が自分の時間を割き、これほど親身になって案内して下さるとは想像だにしておらず、団員一同恐縮もしまた感激もした。日本における同窓会組織というのは、えてして仲良しクラブになりがちであるが、ＰＡＭＡＪＡの場合は青年招へい事業の参加者に対する事前オリエンテーションをはじめとして、積極的に独自の活動を展開している。またメンバー間や人事院との連絡も密に行われている様で、我々一行の日程を人事院に問い合わせ、プログラムに同行してくれた青年も何名かいた。とにかく彼等の連帯意識には目を見張るものがあり、その意識がインド系・中国系といった人の枠を越えたつながりになった時、ＰＡＭＡＪＡの活動はより充実し、より多くの支持を受けるものと思われる。

さて、今回の訪問では我々一行が、来日した時の青年の立場に自分達がなり代わるという、得がたい「逆転」体験をした。何と、そこから学ぶことの多いこと！これまで、多少なりとも青年の立場にたってプログラムを計画していたつもりであったが、いかんせん、スケジュールの立て方・日程や訪問先の説明の仕方・食事のメニューやその時間・通訳・自由時間の設定等、改善すべき点が幾つも思い当たった。やはりマレイシアへ来てみて、日本で１カ月のスケジュールをこなす青年の気持ちが理解できたように思う。

最後に、この１０日間の滞在を通じて一番有り難く感じたことは、マレイシア人の暖かいホスピタリティである。お世話くださったＰＡＭＡＪＡメンバーやホストファミリーは言うに及ばず、食堂のおじさん、ホテルのフロント係、タクシーの運転手、麻薬更正施設の青年、露店のオバちゃん、食事の席で隣あわせた人……多くの人々の顔が浮かんでくる。

お茶の世界に「一期一会」という言葉があるが、どの人からもこの精神に通じる誠意あふれるもてなしを受け、どれも忘れ難い思い出となっている。果たして、私にこれだけのことが出来るか不安でもあるが、今年度の受け入れにこの貴重な体験を生かしプログラムコーディネーターを務めたい。